

(様式1)

「主体的・対話的で深い学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の
重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）」

令和元年度委託事業完了報告書【総括】

都道府県名	愛知県	番号	23
-------	-----	----	----

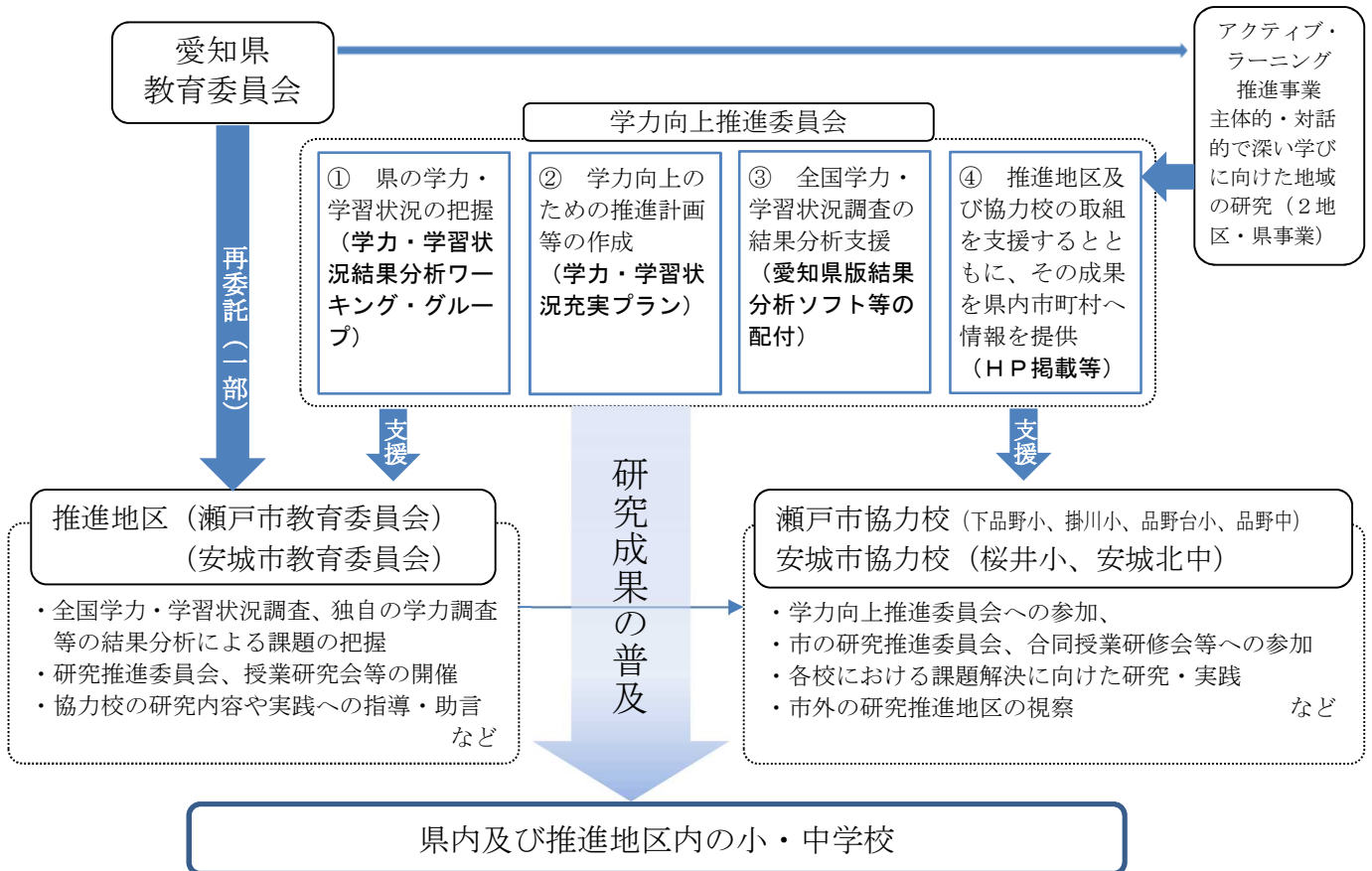
推進地区名	協力校名	児童生徒数
瀬戸市	下品野小学校	440
瀬戸市	品野台小学校	89
瀬戸市	掛川小学校	26
瀬戸市	品野中学校	259
安城市	桜井小学校	900
安城市	安城北中学校	852

○ 実践研究の内容

1. 推進地域における取組

(1) 取組体制の構築

県は、本事業の推進地域として、学力向上推進協議会を中心とする下のような体制を整備し、学力定着に課題を抱える学校への支援に関する調査研究を進めた。



(2) 県の学力・学習状況の把握

県教育委員会義務教育課と県総合教育センター合同で、学力・学習状況結果分析ワーキング・グループを組織し、全国学力・学習状況調査の問題及び結果の分析、それらを踏まえた指導改善のポイントの策定を行った。とりわけ、本年度は小学校国語調査において全国の平均正答率との差が大きかったことから、解答類型等にも着目し詳細な分析を行った。

(3) 愛知県学力向上推進委員会の設置と推進計画等の作成

愛知県学力向上推進委員会を組織し、協議を通じて、実践地区の取組や本県の学力の課題に沿った指導・助言を行った。加えて、学力向上のための推進計画である「学力・学習状況充実プラン」について、積極的活用が図られることを目指して内容等について協議を行うとともに、各推進地区の有効な取組をまとめた「授業等アドバイスシート」を提案するための協議を行った。

<委員会で確認した主な事項>

- ◆ 令和2年度4月より、小学校から順次新学習指導要領が完全実施されることを踏まえ、知識の理解の質をさらに高め、確かな学力を育成する取組となるよう助言を行った。
- ◆ 授業力向上のための研修会や、カリキュラムマネジメントを意識して教育活動の工夫を行った取組、学校と家庭をつなぐための取組について、全県に広めていくよう確認した。

(4) 愛知県版結果分析ソフトの作成・配付（8月配付）

愛知県教育委員会では本年度より、各学校が自校の児童生徒の学力傾向や学習状況について簡便に分析できる「愛知県版結果分析ソフト」を作成し、8月上旬に各学校及び市町村教育委員会に配付した。各学校では、調査結果が出た夏季休業期間中に分析を行い、2学期からの授業改善に生かすことができた。

(5) 学力・学習状況充実プラン（小学校版・中学校版）（12月～配付）

小学校・中学校それぞれの調査結果から明らかになった課題や課題解決のための授業改善のポイント、各設問の正答率から明らかになった個別の課題とその改善の方向性をまとめ、県内全小中学校に配付した。

(6) 「授業アドバイスシート」（学力・学習状況充実プランと同時に配付）

明らかになった課題解決のための具体的な取組のポイントや授業アイデア、授業で活用できるプリント等を作成し、県内全小中学校に配付した。

(7) 全国学力・学習状況調査の結果等を活用した研修

① 全県に向けた課題分析研修会（学校教育担当指導主事会）

県内53市町村教育委員会の指導主事や県関係者を対象として、調査結果を生かすための研修会を行った。分析結果を基にした授業改善や、児童（生徒）質問紙の質問項目における回答の状況について課題を共有することができた。

② 教育事務所等を単位とした研修会

下の表に示す日程で、各教育事務所単位の研修会等を行い、愛知県版結果分析ソフトや解答類型を使った地区の結果分析の仕方について情報を共有した。また、初めて行われた英語調査についても、地区の詳しい分析を行った。

期 日	時間	地 区 名	場 所	参加者	参加者数 (人)
11 / 15 (金)	9:00～9:20	海部地区	海部教育事務所	担当指導主事	16
12 / 2 (月)	10:00～10:30	東三河地区	東三河県庁	担当指導主事	38
12 / 6 (金)	9:30～10:00	西三河地区	西三河教育事務所	担当指導主事	42
12 / 5 (木)	9:30～10:00	海部地区	あま市庁舎	各校校長	14

瀬戸市

2. 推進地区における取組

(1) 主体的・対話的で深い学びを生み出す授業の工夫

① 「中学校ブロック小中一貫教育」に基づく各校での現職教育の充実

今年度設定した中学校ブロックごとの重点努力目標を達成するために、各校の児童生徒の実態に応じた研究テーマを設定し、現職教育に取り組んだ。

② 「瀬戸の学び創造委員会」による分析と提案

ア 令和元年度全国学力・学習状況調査の問題分析

今年度の問題から全教員に取り組んでもらいたい問題を数題抽出し、問題の特徴と選んだ理由、概要、ねらい、学習指導の改善・充実のポイントについて分析を行った。

イ 結果分析

各校の結果について、前年度の比較を通じた分析を行い、中学校ブロックごとに小中合同で意見交換をした。さらに、ここでの意見を参考に、各校で学力向上に向けての今後の方針を作成し、冊子にまとめ、配布した。

③ 「CRT」の実施

小学校の早期段階で児童の基礎学力を把握し、今後の学習指導の工夫改善等に役立てるために、小学4年生対象に国語と算数で実施した。なお、平成29、30年度は「瀬戸市基礎学力習得調査」と称したテストを小学3、4年生対象に国語と算数で実施していたが、今年度より、CRTで統一した。

(2) 家庭学習の充実

協力校を中心に、家庭学習の各学年における目安時間の設定、連絡帳を介した保護者との連携、また、中学校では、模範となる家庭学習ノートをホームページで紹介するなど家庭への啓発を進めた。

(3) 教師の指導力向上

① 教員一人ひとりへの働きかけ

ア 「わたしが創る瀬戸の学校」作成・配布

学校目標を達成するために教職員が自らの強みを生かし、一つの重点目標に向かって1年間のPDCAサイクルを回せるワークシートを作成した。

イ 「教員研修」の開催

全教員対象、経験別・役職別対象、そして協力校対象の研修会を複数回行った。

② 各中学校ブロックへの働きかけ

「中学校ブロックごとによる小中一貫教育」の推進

令和2年度より全小中学校において、中学校ブロック別の小中一貫教育を進めていくにあたり、今年度は、各中学校ブロックにおいて、共通の「目指す生徒像」を設定した。

また、小中合同の職員会議や指導力向上研修の開催、相互授業参観や中学校の教員が小学生に指導する乗り入れ授業などを実施した。

3. 協力校における取組

(1) 基礎基本となる知識技能の定着と、学び合いを取り入れた授業の推進

「学び合い」の先進校である品野中学校の取組を知るため、授業参観や研究協議会への参加を行った。また、「基礎学力定着委員会」を立ち上げ検討したり、ユニバーサルデザインの理念に基づいた視覚支援の在り方について検討を重ねたり、毎学期、漢字と計算の「がんばりテスト」を全学年で実施したりした。また、1授業時間の構成で「ねらい」と「振り返り」を必

ず取り入れるようにした。

(2) 家庭学習の充実

基礎基本となる知識技能を定着させるために、家庭学習についての在り方を検討したり、家庭学習を通じた学習習慣の定着の大切さや模範となる取組を保護者に伝えたりした。

(3) 教員の指導力向上

指導力向上に向けたブロック内での合同研修、研究授業参観、先進校の視察を実施した。

○ 実践研究の成果

1. 協力校における取組の成果

(1) 基礎基本となる知識技能の定着と、学び合いを取り入れた授業の推進

中学校ブロックで学力向上への目標を掲げ、目の前の児童生徒を見つめなおし、何が欠けていて何が必要かということを全教職員で検討する機会を得たことは大きな成果である。また、学力向上のための授業改善に向け、各校がこの一年取り組んだことは、児童生徒や職員にかなり定着してきた。

(2) 家庭学習の充実

学校評価では、家庭学習に関する項目において、児童・保護者ともに昨年度より伸びを示した。また、全国学力・学習状況調査では、決められたことはできるものの、自主的・主体的に取り組むことが苦手だという結果が見られた。「取り組みたくなる家庭学習」、加えて「効果的な家庭学習」について追求し、児童生徒の自学自習の取組へつなげたい。

(3) 教員の指導力向上

各校のミドルリーダーの教員が先進校を視察し、各校で取り入れられることを実践につなげた。また、同じ講師が4校のアドバイザーを務め、特設授業とその後の協議会で中心となって取り回しや指導を行うことで、各校の授業力向上に努めた。実際に各校を行き来し、その取組を目にすることは教員全員にとってよい刺激となった。それらの取組のもと、現職教育でも学力向上に取組み、学校体制で授業改善を行うことができた。

2. 実践研究全体の成果

小中一貫教育を推進する上で、学力向上への取組は大きな課題であった。今回、研究の機会をいただき、中学校ブロックで共有の目標を持ち、それに向かって各校が研究、改善を進めることができたことは大きな成果である。

また、令和元年度の全国学力・学習状況調査の結果も昨年度より向上が見られ、成果があったといえる。

3. 取組の成果の普及

- ・ 「わたしが創る瀬戸の学校 2019」を作成し、全教職員に配布し、瀬戸市の目指す教育、そして教師像の共有化を図った。
- ・ 4月25日（木）に、市内全教職員を対象とした学力向上に向け、基本に立ち返る意味を込めて、「教科書の使い方」をテーマに研修会を開催した。
- ・ 教務主任者対象に、定期的に研究の進捗状況や成果を報告する機会をもった。そして、中学校ブロックで、発表し合い、情報の共有を図った。その際、協力校には、学力の面を中心に発表を行った。
- ・ 協力校の授業公開を行い、市内の教員に参観してもらい、普及に努めた。

○ 今後の課題

瀬戸市ではこれまで伝統として、各校の独自性を大切にして教育活動を進めてきた。しかし、今回、各中学校ブロックにおける小中一貫教育を推進するにあたり、共通の目標、そして目指す生徒像を掲げるよう要請した。小・中学校が足並みをそろえて教育活動を行うことに慣れておらず、戸惑うことも多く、何を実際に進めていくか戸惑いや試行錯誤も見られた。しかし、共通の取組を行ったり、各校で講師を招いて現職教育を進めるブロックもあるなど、小・中学校が一貫して取組む良さが認知されてきている。今後は、教育委員会主催の研修を精選し、各校が児童生徒の9年間を見通した系統的・横断的な学習活動がさらに推進され、育成すべき資質・能力の実現に向けた学習方法や指導方法の改善を考え、各校の現職教育がより良いものとなるよう、サポートに努めていきたい。

安城市

2. 推進地区における取組

(1) 主な取組内容

① 一人一人の居場所と役割があり、自己有用感が高まる学級経営

児童生徒一人一人を支える温かい学級経営を目指し、年度当初に学級実態を細やかに把握した。児童生徒向けの学校生活アンケート（Q-U、Y-Pアセスメント）を複数回活用し、自己肯定感や自己有用感の育成を柱に、一人一人の居場所と役割がある学級経営を目指し、児童生徒のよさを認めたり、自分に自信をもてるような場面を設定したりする具体的方法について検討した。

② 自分の力を発揮し、仲間と学びを深める、主体的・対話的な学びの授業展開

仲間とのかかわり合いを通して学びを深めていく授業を目指し、「主体的・対話的で深い学び」につながる授業実績を共有しながら、学級の実態に合わせて実践を進めた。児童生徒一人一人が自分の力を発揮して、仲間とともに学びを深めていくための教師支援（課題設定・発問・板書・座席表・ふり返り等）を検討し、実践の実績を積み重ねた。

③ 学校と家庭が連携し、ICTを有効利用した家庭学習支援

学校と家庭が連携して、家庭においてICT機器（家庭学習支援ソフト）を利用して学習したことが授業に生かされるような実践に取り組んだ。自宅でICT機器を利用して各教科で学んだことを、既習事項の確認として授業で生かすようにした。更に、授業で学んだことをもとに、自宅でICT機器を利用して復習できるようにし、家庭での学習習慣を身に付けられるようにすることで、自主的に家庭学習に取り組むことができるモデルをいくつか構築した。

3. 協力校における取組

(1) YPやQ-Uのアンケートデータをもとにした、自己肯定感や自己有用感をもたせるグループワーク等の実践

YPやQ-Uのアンケートデータをもとに、学級経営や支え合う環境づくりについて研修を行ったり、体育の授業におけるボールゲームの対戦において、仲間と関係をもたせるワークシートを作成したりするなど、児童生徒が自己肯定感や自己有用感をもちながら活動をすすめるための実践を行った。

(2) 学び合う授業づくりによる、児童や教師の学び合いへの意識の向上を図る実践

学び合う授業についての授業実践を行い、授業公開、研究協議を大学教授等からの助言を得ながらすすめた。教師も児童も学び合いのよさについて実感をもつことができ、授業に前向きに取り組もうとする姿がみられた。

(3) ICTを活用し、自宅で学習する機会を増やす実践

パソコンやスマートフォンから家庭学習をする仕組みを作り、学校ホームページのバナーから学習支援ソフトを活用して学習する機会を設けた。

○ 実践研究の成果

1. 協力校における取組の成果

(1) 自己肯定感や自己有用感をもたせるグループワーク等の実践

子ども一人一人の成長を見取り、じっくりと子どもを理解することができ、学級経営に対する職員の意識の向上を図ることができた。また、生徒の自己肯定感や所属感の高まりもみられた。

(2) 学び合う授業づくりによる、児童や教師の学び合いへの意識の向上を図る実践

児童や教師がそれぞれ、学び合うことのよさへの意識の向上を図ることができた。

(3) ICTを活用し、自宅で学習する機会を増やす実践

ICTを生かした家庭学習の充実を図ることができた。

2. 実践研究全体の成果（3. 取組の成果の普及）

(1) 取組内容①：一人一人の居場所と役割があり、自己有用感が高まる学級経営

本年度、多くの教師が、子ども一人一人の成長を見取り、じっくりと子どもを理解することができ、子どもの自己肯定感等が高まっていく手応えを感じた。今後は、より長期的に児童生徒の成長を見て、様々な手立てがどのような効果として現れるのか、分析する必要がある。

(2) 取組内容②：自分の力を発揮し、仲間と学びを深める、主体的・対話的な学びの授業展開

仲間とのかかわり合いを通じて学びを深めていく、学び合いの授業づくりについては、子どもの意識の変化を見取ることができた。学び合いの授業づくりの具体的な方法が汎用化され、多くの教師で共有できたり、各教師が部分的に選択して利用したりできるようになったと考える。

(3) 取組内容③：学校と家庭が連携し、ICTを有効利用した個の家庭学習の支援

ICTを使って家庭学習をしたことが、学校の授業で生かされるような授業の組み立てができたとともに、自宅でもICTを使って学習する機会を増やすことができた。ICTを利用した家庭学習の機会は今後も増加すると考えられ、さらに様々な教科や学年で使用できるように汎用化を図りたい。

○ 今後の課題

- ・ 長期的な視野で、自己有用感、自己肯定感等をも高める手立ての模索
- ・ 学び合いの授業実践を共有し参考にできるネットワークの強化
- ・ ICT活用の更なる普及と、学校と家庭をつなぐ新しい可能性の模索

(様式2)

「主体的・対話的で深い学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の
重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）」

令和元年度委託事業完了報告書【推進地区】

都道府県名	愛知県	番号	23
-------	-----	----	----

推進地区名	瀬戸市
-------	-----

1. 研究課題

小中一貫教育による学力向上を目指して
～中学校ブロックで行う、子ども同士、家庭、教職員の協働～

(1) 主体的・対話的で深い学びを生み出す授業の工夫

本市は、協力校で研究実践してきた学び合いの授業を推進しており、児童生徒が自ら課題をもち、仲間と支え合いながら解決していく過程で生まれる新たな自分との出会い・発見を大切にしている。しかし、学力向上には、学び合いと知識・技能の定着の両輪が必要だと考え、基礎・基本の定着を図る主体的・対話的で深い学びを生み出す授業を目指す。

(2) 家庭学習の充実

学習習慣の確立、基礎・基本、そして授業内容の定着などを目的としているものの、児童生徒の能力に適していなかったり、反復練習に偏ったり、児童生徒自身に必要性が十分感じられなかったりする課題が多い傾向が見られる。そこで、「意味のある家庭学習」の在り方を検討し、家庭との連携や地域との協力なども含めた見直しを進める。

(3) 教員の指導力向上

児童生徒の学力の向上には、教員の授業力、そして指導力向上が欠かせない。本市では、これまで、教員一人ひとりにスポットを当て、役職者、担当者、そして経験者対象の研修等を実施してきた。それに加え、本市が令和2年度から各中学校ブロックで進める小中一貫教育を推進するため、全教職員、そして中学校ブロックに対して、組織的な研修の機会をもつよう声をかけてきた。9年間を見通した切れ目のない教育を実践できる教員の育成を図っていく。

2. 研究課題への取組状況

(1) 主体的・対話的で深い学びを生み出す授業の工夫

① 「瀬戸の学び創造委員会」による学力向上の推進

ア. 全国学力・学習状況調査の問題分析と提案

各教科の専門委員が、今年度の問題から全教員に取り組んでもらいたい問題を数題抽出し、問題の特徴と選んだ理由、授業への活用の仕方や学習指導の改善点について、教務主任対象の研修会で提案した。

イ. 各校の学力向上の取組への支援と手立ての検証

各校の具体的な取組のうち、結果として効果のあった取組を列挙してもらい、それをまとめ、各校に配布した。後日、中学校ブロックごとに小中合同で教務主任が意見交換をした。さらに、ここでの意見を参考に、各校で学力向上に向けての今後の方針や取組を作成し、冊子にまとめ、配布した。

② 「瀬戸市基礎学力習得調査」から「CRT」の実施

平成29年度より下記のような市独自の基礎学力習得調査を実施していた（2学期）。

ア 対象学年 小学校3年生、小学校4年生

イ 出題内容 国語・・・漢字の書き取り、語句の意味、簡単な読み取り等30問
算数・・・計算を中心とし、簡単な文章題等30問

ウ 成績処理 各校から回収した得点を分析し、「市全体の各教科の平均点」「市全体の各教科の得点分布」「市全体の各教科の中央値」を各校に通知。

平成30年度は「瀬戸市基礎学力習得調査」と「CRT」の両方を実施した。得られる情報に大きな差がないことと働き方改革の一環を考慮し、令和元年度は、小学校4年生を対象に、国語・算数・社会・理科の4教科で「CRT」のみを実施することとなった。

③ 基礎学力定着の取組例

外国にルーツを持つ児童の多いA小学校は、お昼の時間帯に漢字の読み書きと計算について繰り返し取り組んでいる。全校体制でコンクール方式で行っている。

(2) 家庭学習の充実

協力校を中心に、家庭学習の各学年における目安時間の設定、連絡帳を介した保護者との連携、また、中学校では、模範となる家庭学習ノートを教室に掲示したりホームページで紹介したりするなど家庭への啓発を進めた。

(3) 教師の指導力向上

① 教員一人ひとりへの働きかけ

ア 「わたしが創る瀬戸の学校」作成・配布

教員研修の手引きとして毎年作成し、配布している。今年度は「魅力ある学校・学級づくり」として、カリキュラム・マネジメントとOJTの推進を掲げ、教材研究と授業改善の取組を強化する紙面とした。そして、学校目標を達成するために教職員が自らの強みを生かし、一つの重点目標に向かって1年間のPDCAサイクルを回せるワークシートを作成した。

イ「教員研修」の開催

i) 全教員対象

4月25日(木) 「教科書の使い方について」 講師：愛知教育大学 鈴木健二氏

ii) 経験別・役職研修

7月24日(水) 4年目教員研修+希望者

「先生と保護者のつながり合い ～保護者との関係づくり～」

講師：名城大学 教職センター 教授 曾山和彦氏

7月26日(金) 学校経営研修

「これからの未来を生きる子どもたちが育つ学校づくり」

講師：A-sessions 代表 上井靖氏

8月7日(水) 3年目教員研修+希望者

「発達につまずきのある子どもたちの背景の理解と関わりのコツ」

講師：東京都立矢口特別支援学校 主任教諭 川上康則氏

8月21日(水) 2年目教員研修

「Q Uの結果を生かした学級経営」

講師：杉村秀充氏

8月23日(金) 初任者研修+希望者

「クラスのみんなが参加する授業を考えよう！」

講師：教育コンサルタント 大西貞憲氏

2月7日(金) 教務主任研修+希望者

「新学習指導要領実施の留意点と具体的な取組」

講師：初等中等教育局課程課 教育課程第一係 加藤 篤氏

iii) 各校で取り組まれている実践

ii) で挙げた研修の中で5年間継続して曾山先生の研修が行われた。そこでは、ソ

ーシャル・スキル・トレーニング(以下：SST)と構成的グループ・エンカウンター(以下：SGE)を組み込んだ取組を1回10～15分で週1回の割合で取り組むことで学級経営が安定し、学力も向上する話をいただいた。実際に取り組む学校が増え、市内で広がりを見せている。以下に具体的な取組を記す。

各校で「〇〇タイム」と称し、業前の時間にSSTとSGEを4人班で行い、「アドジャン」、「どっちが好き」、「いいところみつけ」、「質問じゃんけん」等が取り入れられている。

ここでは、アドジャンの方法を説明する。

4人班でアドジャン(ゲー(0)、指1本～指5本までの6種類で「アドジャン」の掛け声とともに出す

合計数	お題
0(10)	好きな食べ物は？
1	行ってみたいところはどこ？
2	好きなタレントは？
3	好きなテレビ番組は？
4	好きな色は？
5	よくする遊びは？
6	最近うれしかったことは？
7	好きな教科は？
8	生まれ変わるとしたら男？女？
9	好きな動物は？

じゃんけん)をし、班員の指の出した合計数を求める。合計が2桁になった場合は、1の位とし、左表の合計数の欄に記載してある「お題」で一人ずつ順に一言二言の話をする。全員が話し終わったら、またアドジャンをし、お題を変えて話を続ける。その後、もっと聞いてみたいことや話してみようと思ったかをアドジャンを振り返って終わる。

アドジャンを始める前に、相手の話を「聞く」ときは、否定することなく相手の顔を見て、うなずいて聞くことや、挨拶をすること、振り返るときに相手の名前を呼んで話すなどを児童生徒に伝える。

iv) 協力校対象 (別紙 協力校報告書参照)

品野中学校では、11月1日(金)に午前中は全ての授業を市内の教員を対象に公開し、午後は特設授業後に協議会を開催した。

② 各中学校ブロックへの働きかけ

本市では、令和2年度より全小中学校において、切れ目のない9年間の教育を展開できるよう、中学校ブロック別の小中一貫教育を進めていくこととしており、各中学校ブロックにおいて準備を進めてきた。そのため、小中合同の職員会議や指導力向上研修の開催、相互授業参観や中学校の教員が小学生に指導する乗り入れ授業などを積極的に実施するようになった。

昨年度設定した中学校ブロックごとの重点努力目標を発展させ、今年度は9年間を見通した中学校ブロックごとの目指す子ども像を設定した。そして、それを達成するために、各ブロックの児童生徒の実態に応じた研究テーマを設定し、現職教育に取り組んだ。

◇ 光陵中ブロックの例

小中一貫教育における目指す子ども像を「感謝と思いやりの気持ちを素直に表せる児童・生徒の育成」と設定した。それを実現するために四つの分科会を作り、各校で各分科会の所属する教員を決め、各分科会が必要に応じて集まり、今年度の目標と具体的な取組を話し合い実践した。以下に各分科会の名称と今年度の目標を示す。

i) 授業づくり部会

- ・「読み・書き・計算」の時間を確保する。

ii) 生活習慣作り部会

- ・笑顔で挨拶ができるようにする。—挨拶は心を開くツール—

iii) 心づくり部会

- ・自己肯定感を高める。
- ・基本的な生活習慣の定着を図る。

iv) 体作り部会

- ・授業の導入時に「縄跳び」を取り入れた活動を行う。
- ・食事の時のマナーとルール作りを検討する。

3. 実践研究の成果の把握・検証

(1) 成果の把握のための全国学力標準検査（教研式 CRT 検査）の結果と全国学力・学習状況調査の結果は以下に示すとおりである。

① 全国学力標準検査（教研式 CRT 検査）の結果

		国語		領域等別平均得点率(%)						算数		領域別平均得点率(%)				
				平均得点率(%)	話すこと・聞くこと	書くこと	読むこと	国語の特質に関する事項	伝統的な言語文化と			平均得点率(%)	数と計算	量と測定	図形	数量関係
小 4	H 31	市	63.3	77.8	54	54.7	66.2	H 31	市	69.8	73.4	67.2	78.3	58.1		
		※1 A	60	75.9	42.4	56	65.4		A	63.8	70.8	57.2	75.1	47.9		
		国	65.8	79.2	59.2	56.7	68.2		国	73.3	76.5	70.7	81.6	62.6		
	H 30	市	63.1	78.3	59.3	48.3	64.7	H 30	市	71.4	76	67.7	74.9	60.0		
		A	44.7	64.2	35.7	26.1	43.4		A	61.2	67.2	53.6	69.3	42.8		
		国	64.9	78.8	61.2	51.9	67		国	75	78.7	72	77.5	65.8		

※1：Aは、2（1）③で触れた基礎学力の定着に向けて昼の時間を使って取り組んでいる学校

② 全国学力・学習状況調査の結果

		国語		領域等別平均正答率(%)				算数・数学		領域別平均正答率(%)						
				平均正答率(%)	話すこと・聞くこと	書くこと	読むこと	国語の特質に関する事項	伝統的な言語文化と			平均正答率(%)	数と計算	量と測定	図形	数量関係
小 6	H 31	市	59	67.6	50.3	77.7	46.9	H 31	市	66	62.4	52.1	76	67		
		※1 A	45	60	43.3	63.3	26		A	56	57.9	33.3	70	52.1		
		国	63.8	72.3	54.5	81.7	53.5		国	66.6	63.2	52.9	76.7	68.3		
	H 30	市	50	60.6	39.9	42.4		H 30	市	49	56.3	49.5	54.8	42.8		
		A	44	57.9	33.7	18.4			A	47	59.6	50	44.7	37.9		
		国	54.7	64.6	45.6	50.8			国	51.5	58.4	52.4	59.9	45.1		
	H 29	市	54	61.2	49.0	44.3		H 29	市	45	51.5	50.7	11.1	38.7		
		A	34	31.7	30.0	31.7			A	26	34.0	27.5	5.0	19.4		
		国	57.5	64.9	53.4	49.2			国	45.9	52.8	47.0	13.2	40.0		
	H 28	市	55.4	49.0	50.4	66.9		H 28	市	46.3	43.2	42.9	35.4	41.1		
		A	30.0	22.6	27.4	35.7			A	28.6	26.2	32.1	26.2	23.8		

	国	57.8	51.1	53.4	69.3		国	47.2	44.4	43.7	36.3	42.9
--	----------	-------------	-------------	-------------	-------------	--	----------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------

中 3	H	市	71	68.1	79.9	71	68.6	H	市	63	68.1	73.9	43.8	58.2
	31	国	72.8	70.2	82.6	72.2	67.7	31	国	59.8	63.8	72.4	40.8	56.3
	H	市	60	77.7	29.7	51.9	45.2	H	市	49	52.7	49.1	52.8	41.7
	30	国	61.2	76.6	31.3	53.5	49.2	30	国	46.9	51.4	46.7	52.8	38
	H	市	72	72.8	60.8	70.7	40	H	市	49	46.6	47.7	51.8	53.2
	29	国	72.2	72.4	60.8	72.1	41.4	29	国	48.1	46.3	47.1	50.8	49.1

※1：Aは、2（1）③で触れた基礎学力の定着に向けて昼の時間を使って取り組んでいる学校

※2：平成30年度以前の国語及び算数数学は、主体的・対話的で深い学びを考慮し、B問題の結果を記載

「自分には良いところがあると思いますか」 「平日、学校外で勉強する時間は？」

			どちらかといえば、						平日、学校外で勉強する時間は？			
			当てはまる	当てはまる	当てはまらない	当てはまらない			1時間以上	30分以上	30分未満	全くしない
小 6	H31	市	39.9	43.2	11.9	4.9	H31	市	48.1	31.4	15.3	5.1
		国	38.8	42.4	13.4	5.3		国	66.1	24.1	7.6	2.3
	H30	市	39.1	44.2	13.5	3.1	H30	市	48.6	28.1	16.5	6.5
		国	41.2	42.8	11.6	4.3		国	66.2	23.8	7.4	2.5
	H29	市	37.5	40.9	13.8	7.8	H29	市	47.6	29.3	16.2	6.6
		国	38.6	39.3	14.9	7.0		国	64.4	24.3	8.4	2.9
	H28	市	35.4	40.4	16.3	7.8	H28	市	46	31.1	16.2	6.6
		国	36.2	40.1	16.2	7.4		国	62.5	25.4	8.9	3

中 3	H31	市	32.2	46	15.7	6	H31	市	66.2	18.9	9.9	4.8
		国	29	45.1	18.6	7.3		国	69.8	17.2	8.4	4.4
	H30	市	34.2	48.2	13.5	4.1	H30	市	65.8	19.1	9.8	5.1
		国	33.7	45.1	15.2	6.0		国	70.6	16.6	7.9	4.9
	H29	市	31.7	42.9	19.0	6.3	H29	市	65.1	19.3	10.4	5.1
		国	28.2	42.5	20.5	8.6		国	69.6	17.2	8.3	4.9

(2) 成果の把握・検証について

① 学力面について

ア 小学校

平成30、31年度の小4国語と算数のCRTの結果からは、全国より低い結果であり、例年と変わり映えがなく、正答率の向上が見られなかった。

小6の国語も、全ての領域で全国の正答率より低いままで、成果といえるものはない。

一方、算数でも、例年通り全国の正答率より低い。しかし、ここ数年来で、平成31年度は、全国との差が最も縮まった。この点は、学力の向上の成果があったともいえる。

この要因は、全ての小3、4年を対象に、平成29、30年度と「瀬戸市基礎学力習得調査」を実施し、一人ひとりの基礎学力を把握し、補充を行ったことが考えられる。問題作成を市内の教員で行い、基礎を大切に作る意識が、市内で共有できたからと思われる。

また、A小では、全校体制で学校独自にお昼の時間帯を使い漢字の読み書き、計算の基礎学力向上に取り組んできた。まだまだ、全国の正答率より低いですが、少しずつ成果が見られる。

イ 中学校

中3の国語では、全国の正答率より低いですが、小6と比べると、全国との差は縮まる。また、現中3が小6（平成28年度）の時は全国より-2.4ポイントであったが、中3では、-1.8ポイントと縮まっており、小6から中2にかけて、全国より学力向上につながっていると言える。

数学では、その点がより顕著となる。現中3が小6の時は、全国より-0.9ポイントであったが、中3では、+3.2ポイントとなり、やはり小6から中2にかけて、全国より学力の向上が見られ、一定の成果があると言える。

中学校で学力に向上が見られる要因は、次の三つが考えられる。

一つめは、中学校に入ると、平日、家庭で勉強する時間が増えることが挙げられる。小6では、一時間以上勉強する児童が、全国より、毎年-1.8ポイントである。それが中3になると、一時間以上勉強する生徒が、全国より-4ポイントほどと随分縮まる。この点が大きく影響しているように思われる。

家庭で勉強数時間が増加するのは、全ての中学校で、毎日宿題が課されていることも関係している。毎日1教科ずつ、B4もしくはA3サイズの復習プリントが用意され、裏面は解答とその解説が記されており、各自で丸付けを行い、翌日提出する仕組みとなっている。そのため、小学校より勉強する時間が増加していると思われる。

二つめは、小中一貫教育を進めるに当たり、異校種で授業を見合っていることが挙げられる。小学校の授業の様子を見ることで、きめ細かな維持や補助発問の重要性に改めて気づく教師がいる。また、これまで中学校では、一斉型の授業スタイルが多く見られた。しかし、「学び合い」の普及で、授業中、本時の課題を理解するために話し合ったり離席してもかまわない時間を設けたりする授業スタイルが小学校より多く見られるようになってきた。

三つめは、教科担任制ということである。専門性のある授業となっていることと、一つめと関連するが、宿題を教科担任が手作りできる点があげられる。また、定期テストの作成においても、全国学力・学習状況調査の問題に似ている問題を取り入れることもできる。その点は、学び創造委員会で問題分析が行われ、特徴的な問題を知り、取り入れやすくしていることも功を奏している。

② 学習状況調査より

ア 家庭学習

前述のように、家庭での勉強時間が全国より低い状況があったが、協力校のような取組を行っている学校が増えたことで、勉強時間が確保されるようになった。全く家庭学習をしない児童の割合は、全国の二倍もいるが、徐々に減る傾向になってきた。

イ 自己肯定感

4年前から、夏休みの研修会に名城大学の曾山教授を招聘し、研修会を開くようになった。教員と児童生徒をつなぐ縦糸と児童生徒同士をつなぐ横糸。両方の糸を紡ぐ重要性を語ってもらうと同時にそれぞれの糸の強化の仕方を教えていただいた。口コミで広まり、毎年100名以上が参加する会となった。そして研修会の内容を生かしながら、各校で10～15分ほどのSSTとSGEを組み込んだ取組が広まってきた。

「自分にはよいところがある」の質問紙調査の結果が良くなってきているのは、各校で行われつつある、自己肯定感を高めるための取組が成果となって現れてきているといえる。主体的・対話的で深い学びを実現するためには、児童生徒の自由な発言が保証される必要があり、その土台ができつつあるように思われる。

4. 今後の課題

(1) 主体的・対話的で深い学びを生み出す授業の工夫

① 授業改善

一斉授業からの脱却で主体的・対話的となる授業は、見受けられるようになった。しかし、深い学びとなっている授業は、まだまだ見られないのが現状である。

令和2年度、小中一貫教育を進めるに当たり、中学校ブロックで市費による非常勤講師を一人配置することになった。これまで以上に異校種への乗り入れ授業が可能になることや、小学校高学年で教科担任制を視野に入れた動きが可能となる。そこで、授業改善が図られるよう取り組んでいきたい。

② 基礎学力定着に向けた取組

本市では、学校間の学力差が大きいため、A小のような地道な取組を紹介し、普及させていくことも必要であると考えている。

(2) 家庭学習の充実

質問紙調査から、授業以外での勉強時間の差が大きいことが分かっている。今年度、市のHPにもUPしたが、各校が意図的な課題を計画的に出せるよう協力校の取組を伝えていく必要がある。

また、本市では令和2年度から中学校ブロックを中心とした小中一貫教育が推進される。そこで、中学校で取り組まれている家庭学習が小学校においても教科担任の視点で改善されていくようサポートしていきたい。

(3) 教師の指導力向上

① 授業力向上のための研修

鈴木健二先生の「教科書の使い方について」の研修では、基本的な教材研究の仕方を指導していただいた。しかし、授業に関する研修が少ないので、質の高い研修を企画運営する必要がある。ただ、単発的な研修では、授業力向上へと結びつかない。だから、各校の現職教育が充実するとともに、日頃のOJTが行われる学校となるよう支援していきたい。そこで、次年度は、小中一貫教育を進めるに当たり、中学校ブロックごとで、講師を呼ぶ際の助成金を出すこととした。

② 自己肯定感を高めるための取組

曾山先生に教えていただいた「〇〇タイム」が、各校に広がりを見せている。週1回行うことが一番効果的と教えていただいた。しかし、週1回取り組んでいる学校は4分の1ほどである。各校の事情もあり、なかなか時間の確保が難しいようだ。

また、12月の講演会で、上手な取組の様子を動画で見せていただいた。質的な違いを実感することができた。今後は、週1回の時間を確保しつつ、質的な向上が図られるようにしていきたい。

「主体的・対話的で深い学びの推進事業」における
「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）」

令和元年度委託事業完了報告書【推進地区】

都道府県名	愛知県	番号	23
-------	-----	----	----

推進地区名	安城市
-------	-----

○ 推進地区として実施した取組内容

1. 研究課題

(1) 各教科における本市小中学校の現状と課題

令和元年度における本市の各教科の平均正当数・正答率を全国の結果と比較すると、多くは平均的な結果となった。主な特徴は、小学校においては国語で全国平均を下回り、中学校では数学の一部領域で上回った。

小学校においては、国語では、「言語に関する知識・理解・技能」に特に課題があるという結果となった。算数では、ほぼ全国と同等の平均正答率であったが「数量や図形についての技能」の整数と小数の計算等に課題があるという結果となった。

中学校においては、国語では、ほぼ全国平均と同等の結果となり、一部「読む能力」について、「情報を整理して、内容を捉える」で正答率が高い結果となった。数学は全国平均正答率を上回り、特に「数学的な技能」の反比例の式で表すことや「数量や図形などの知識・理解」の表を読み取る設問では正答率が高い結果となった。英語は、ほぼ全国平均正答率とほぼ同等であったが、一部、「聞くこと」の中で、「情報を正確に聞き取る」設問で課題があるという結果となった。また、「書くこと」については「否定文の作成」がよくできているという結果となった。

- 多くの項目で平均的な結果となった。
- 小学校において、国語は全国平均を下回った。
- 中学校において、数学は全国平均を上回った。

(2) 質問紙調査の結果における本市小中学校の現状

生活や経験についての質問紙調査の結果を全国と比較すると、小学校においては「読書をしている」割合が高いことや「算数学習への意欲」が高い結果が見られた。しかしながら、特に、規範意識・自己有用感や主体的・対話的な学習における回答について多くの課題が見られ、「自分にはよいところがある」と思うことや、「自分から取り組んだ」「友達と話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり広げたりした」ことについて低い結果が見られた。

中学校においては、「数学学習」について意欲的であり、内容もよく分かっているという傾向がみられた。しかしながら、「規範意識、自己有用感」「主体的・対話的な学び」の項目については、低い結果が見られた。また、ICTを使用したと回答した割合がとりわけ低い結果となった。国語学習や英語学習においては、「学習が大切だ」と回答する割合が低いなど、意欲面を中心に多くの項目で低い結果となった。

- 小・中学校において、算数・数学の意欲が全国平均より高い。
- 中学校において、国語・英語の学習の意欲が全国平均より低い。
- 「規範意識、自己有用感」に関する質問結果が全国平均より低い。
- 「主体的・対話的な学び」に関する質問結果が全国平均より低い。
- ICTの使用に関する質問結果が全国平均より低い。

(3) 学力と学習状況の相関関係における本市小中学校の現状

教科に関する結果と質問紙調査の結果を比較し、相関関係を分析した。その結果、小学校、中学校ともに、「規範意識・自己有用感」や「主体的・対話的な学び」の項目について、関心があったり前向きな回答をしたりしている児童生徒ほど、正答率が高くなる傾向が見られた。

- 「規範意識、自己有用感」に関して前向きな回答をするほど正答率が高い。
- 「主体的・対話的な学び」に関して前向きな回答をするほど正答率が高い。

(4) 課題をもとに重点目標を考察する

(1) から (3) の現状から、重点的に取り組む必要があることを以下にまとめた。

- ① 一人一人の居場所と役割があり、自己有用感が高まる学級経営
 - 一人一人の学級での所属感、自己有用感を高めながら、学ぶ意欲を育む学級づくりを推し進める。
- ② 自分の力を発揮し、仲間と学びを深める、主体的・対話的な学びの授業展開
 - 各教科の一人一人のつまずきに対応した授業づくりを推進し、考えを仲間と深めたり、伝え合ったりして、学んだことを実感させていく授業を展開していく。
- ③ 学校と家庭が連携し、ICT機器を有効利用した個の家庭学習への支援
 - 児童生徒の基本的な生活習慣や学習習慣が身に付くように、これまで以上に学校と家庭が連携し、特にICT機器の利用を進め一人一人を支えていく。

(5) 課題を受けた研究の構想

① 令和元年度の安城市教育委員会の指導方針より

令和元年度の指導方針で大切にしているのは次の3点である。

- ・命の大切さを実感し、明るく元気に過ごすことができるたくましい体と、しなやかで折れない心を育てる。
- ・学び合いによる教育活動を推進し、「主体的・対話的で深い学び」をとおして、能動的に学び続ける力を育てる。

② 課題をもとにした研究の構想図

この指導方針に添った取組は、前述の課題の具体的な解決につながるものと考え、研究の目標、取組について図にまとめた。(次頁)

研究の目標

「一人一人が大切にされ、かかわりあいのある学校・家庭の中で子どもを育む」

目指す子ども像 <こんな子どもたちであってほしい>

自己肯定感や自己有用感に満ち、命を大切にできる子ども
仲間とのかかわりを喜び、一人一人の学びを深める子ども
学校・家庭に支えられ、自主的・意欲的に学習する子ども

①一人一人の居場所と役割があり、自己有用感が高まる学級経営

②自分の力を発揮し、仲間と学びを深める、主体的・対話的な学びの授業展開

③学校と家庭が連携し、ICT機器を有効利用した個の家庭学習の支援

2. 研究課題への取り組み状況

(1) 主な取組内容

① 一人一人の居場所と役割があり、自己有用感が高まる学級経営

児童生徒一人一人を支える温かい学級経営を目指し、年度当初に学級実態を細やかに把握する。児童生徒向けの学校生活アンケート（Q-U、Y-Pアセスメント）を複数回活用し、自己肯定感や自己有用感の育成を柱に、一人一人の居場所と役割がある学級経営のもと、児童生徒のよさを認めたり、自分に自信をもてるような場面を設定したりする具体的方法について検討していく。講師を招き、各教師の学級経営を専門家からも学び、自己肯定感や自己有用感を高め、命を大切にできる子どもを育てていく。

② 自分の力を発揮し、仲間と学びを深める、主体的・対話的な学びの授業展開

仲間とのかかわり合いを通して学びを深めていく授業を目指し、「主体的・対話的で深い学び」につながる授業実績を共有しながら、学級の実態に合わせて実践を進めていく。

講師を招きながら研修を進め、児童生徒一人一人が自分の力を発揮して、仲間とともに学びを深めていくための教師支援(課題設定・発問・板書・座席表・ふり返り等)を検討し、これからの授業づくりにもつながるような実践の実績を積み重ね、仲間とかかわる喜びを通して、一人一人の学びを深める子どもを育てていく。

③ 学校と家庭が連携し、ICTを有効利用した個の家庭学習の支援

学校と家庭が連携して、家庭においてICT機器(家庭学習支援ソフト)を利用して学習したことが授業に生かされるような実践を進めていく。

自宅でICT機器を利用して各教科で学んだことを、既習事項の確認として授業で生かしていく。更に、授業で学んだことをもとに、自宅でICT機器を利用して復習できるようにし、家庭での学習習慣の構築に生かせるようにする。自主的に家庭学習に取り組む習慣を身に付けさせるモデルをいくつか構築し、学校・家庭に支えられ、自主的・意欲的に学習する子どもを育てていく。

(2) 令和元年度の取組実績

月日	活動内容	取組内容
4月～	eライブラリ用学校HPバナー作成（全小中学校） eライブラリ用児童生徒IDカード作成（全小中学校）	③
5月～	Q-Uを活用した学級経営に関する市教委研修 Y-Pを活用した授業づくりに関する研修（協力校） 相談室のeライブラリ環境整備（市教育センター）	③
6 / 1 1	第1回愛知県学力向上推進委員会（愛知県）	
6 / 2 7	学び合う授業、学級経営に関する講義・研修（協力校） 桜井小学校職員による学び合いの授業研修 講師：日本大学 黒田友紀准教授（桜井小学校）	① ②
7月 ・8月～	推進地区・協力校代表による研修参加（文部科学省等） 全国学力・学習状況調査、学力テストの結果について分析 今後の対策について検討・計画修正	① ②
10 / 2 5	第2回愛知県学力向上推進委員会（愛知県）	
11 / 1 8	学び合う授業、学級経営に関する講義・研修（協力校） 桜井小学校職員による学び合いの授業研修 講師：日本大学 黒田友紀准教授（桜井小学校）	① ②
11 / 2 9	学び合う授業、学級経営に関する講義・研修（協力校） 安城北中学校職員による学び合いの授業研修 講師：名古屋学芸大学 佐藤洋一教授（安城北中学校）	① ②
1 / 3 1	第3回愛知県学力向上推進委員会（愛知県）	
2月	Y-Pを活用した授業資料配付（全小中学校）	③
2 / 1 0	学び合う授業、学級経営に関する講義・研修（協力校） 桜井小学校職員による学び合いの授業研修 講師：日本大学 黒田友紀准教授（桜井小学校）	① ②
2 / 1 4	学び合う授業、学級経営に関する講義・研修（協力校） 安城北中学校職員による学び合いの授業研修 講師：名古屋学芸大学 佐藤 洋一教授（安城北中学校）	① ②

2 / 18	学び合う授業、学級経営に関する講義・研修（協力校） 安城北中学校職員による学び合いの授業研修 講師：岐阜大学 近藤真庸教授（安城北中学校）	① ②
3 / 5	実践研究連絡協議会参加（文部科学省） 研究の報告、総括、次年度への引継ぎ	

※取組内容の①～③は、前頁2の①～③に対応している。

3. 実践研究の成果の把握・検証

(1) 取組内容①

一人一人の居場所と役割があり、自己有用感が高まる学級経営

成果：学級経営について職員の意識の向上を図ることができ、子ども一人一人の成長を見取り、じっくりと子どもを理解することができた。

児童生徒向けの学校生活アンケート（YPアセスメントやQ-U）をもとに、自己肯定感や自己有用感の変容と学級経営の支援の関係を見取った。講師を招き、児童生徒のよさを認めたり、自分に自信をもてるようにしたりする支援についての講義をしていただいたり、授業実践をもとに具体的に指導をしていただいたりした。

<取組内容①の具体例>

協力校の桜井小学校では、YPやQ-Uのアンケートデータをもとに、個の成長を願いながら授業を実践した。5年3組の体育授業におけるボールゲームの対戦前の作戦会議では、教師はアンケートによる児童理解のもとに、仲間と関係をもたせるワークシートを作成した。そして、グループワークを授業の中で設け、ワークシートをもとに教師は効果的な言葉かけをした。普段話し合いに積極的に参加できない児童が、自己肯定感や自己有用感をもちながら、話し合いやボールゲームに積極的に参加できた。右写真1は、「ここが弱いからぼくがここを守るね」と作戦会議で自分の役割を考えて話している様子である。また、その後試合の中でも、右写真2のように自分の役割を話し合い、積極的に授業に参加する姿が見られた。教師が児童の状態を把握し、児童にとって最適な教材を用意し、的確な声かけをしたことで、児童がクラスの中で居場所をもちながら、仲間との学び合いに参加できていた。この例のように、協力校では全ての教師がQ-UやYPのアンケートをもとに児童生徒の実態を分析し、一人一人の児童理解を進め、実践を進めることができた。



写真1 「グループの作戦会議」



写真2 「試合中の声かけ」

また、実践後大学の講師から、子ども理解を進め、一人一人の変容を追うことの大切さを価値付ける講話をいただき、教師の実践のよさを具体的に指摘していただいた。

講師の講話から

- ・子どもを大切にする教師の姿があった。学級に子どもの居場所があった。
- ・支え合っている関係性がみられ、それをもとに頑張る子どもの姿が見られた。

このように講師の先生から、一人一人の子どもの自己肯定感や所属感、自己有用感を高めることへの手立てや、教師の日々の学級づくりについて評価をしていただくことで、「自分の意見を心置きなく言える学級をつくりたい」「たくさん子どもの声を聴いて学級経営を見直したい」など、教師からも意欲的な感想がみられた。

子どもの自己肯定感や所属感、自己有用感を高めることへの具体的な手立てを講師から得ることができ、温かな集団づくりに対する職員の意識を向上することができた。

(2) 取組内容②

自分の力を発揮し、仲間と学びを深める、主体的・対話的な学びの授業展開

成果：子どもや教師の学び合うことのよさへの意識の向上を図ることができた。

学び合う授業について、各協力校で合計77の授業を公開し講師から指導をいただいた。研修を進めていくなかで、学び合いの授業の形が学校全体に浸透してきた。また、授業後に職員による協議会を行い、講師の先生に指導をいただく場も設けたことで、学び合う授業のよさを教師が実感し、自信をもって次の授業に向かうことができた。たくさん授業を公開するなか、子どもたちは学び合うことのよさを繰り返し実感できた。



<取組内容②の具体例>

本年度の6月～2月の間、学び合いを視点に、授業公開に 写真3「グループで話し合う(小学校) において実践された学び合いの単元名の一部である。

- ・小1 図工「うつしてあそぼう ～めざせ！ぺったんめいじん～」
- ・小2 生活「ペアで考えよう ～何番目にいるかな～」
- ・小3 音楽「よりよいリズムを相談して手拍子リズムをつなげよう」
- ・小4 体育「タグラグビーでパスが通るような作戦を考えよう」
- ・小5 道徳「自由と責任について ～本当の自由とはなにか～」
- ・小6 社会「国民の権利と義務について意見交換しよう」

それぞれの授業では、講師に教師の授業について評価をしていただいた。以下は、大学教授等に各教師が授業について価値付けていただいた言葉の一例である。

講師の講話から

- ・夢中で学び、グループの中で支えながら参加している子がいた。
- ・子どもの学びに添った声、トーンで教師が学びを進めていてよい。
- ・教師が全体とグループをうまくつないでいた。子どもが安心して学んでいた。
- ・教室全体とグループがつながる授業がたくさん見られるようになってきた。
- ・古典をもとに場面の読み取りで学び合うという視点がとてもよかった。
- ・子ども同士のアドバイスについて、教師がよさを価値付ける場面がよかった。

このように、何度も学び合いの授業を実践したり、参観し合ったり、大学の講師等に価値付けていただくなかで、「低学年でも似たような学び合いの授業を今度挑戦してみたい。」「自分と違う考えに触れて刺激になった。考えを深めたり広げたりできる授業をとりいれていきたい。」「グループワークはあまりできていないところであるので、とても勉強になりました。」など、学び合いに対する教師の意識の向上をはかることができ、自信をもって授業ができる学校の雰囲気が出てきた。



写真4「グループで学び合う（中学校）」

(3) 取組内容③

学校と家庭が連携し、ICTを有効利用して個の家庭学習を支援

成果：ICTの活用の推進を図ることができ、自宅でもICTを使って学習する機会を増やすことができた。

ICTを生かした家庭学習に向けて、各校教師に配付された各PCに家庭学習支援ソフトを入れ、授業や宿題等で簡単にプリントや教材提示ができるようにした。また、各校のホームページに家庭学習支援ソフト（eライブラリ）のバナーを設け、自宅からスマートフォンやPCで学ぶ機会を設けた。教師にとって身近にソフトがあるため、授業や宿題などでもICT利用が増え、同時に児童生徒の自宅でのICT利用した学習回数や時間が大幅に増えた。また、特別支援学級の児童生徒が学年をまたいで学習できたり、不登校の児童生徒が学校に登校するきっかけとなったりするなど、一人一人の支援にも役立つ成果がみられた。

<取組内容③の具体例>

ICTを生かした家庭学習に向け、以下のような手順で事業を進めた。

- ①各校のホームページに家庭学習支援ソフト（eライブラリ）のバナーを設け、自宅のPCやスマートフォンから児童生徒がアクセスできるようにする。
- ②市内の全児童生徒にIDを発行しカードにして配付し、自宅から家庭学習支援ソフトに入って学習できるようにする。必要時に保護者会を開き活用方法を説明する。
- ③市内全教師に配付されているPCに家庭学習支援ソフトを入れ、授業や宿題等で簡単にプリントや教材提示ができるようにする。また、児童生徒の学習の進捗状況を把握する方法を研修等で伝える。
- ④学校のコンピュータ室において、児童生徒に家庭からの学習支援ソフトのアクセスの仕方を指導する。自宅にICTツールがない児童生徒の配慮からコンピュータ室の開放を休憩時間などに行う。

実践の2年目となる本年度は、協力校だけでなく安城市内全校に家庭学習支援ソフトの利用を促した。教師の授業や宿題などでもICT利用が増えた。各家庭においてパソコンやスマートフォン、タブレットなどからホームページにアクセスし、そこから家庭学習をする児童生徒が多数見られた。学校のホームページにも、自宅におけるICTを利用した家庭学習についての記事を載せ、活用を促した。以下は学校のコンピュータから学校のホームページにアクセスして家庭学習支援ソフトを利用した授業の後、協力校が学校ホームページにその様子を載せ、家庭学習を促した記事である。

「4年生がコンピュータを活用した授業を行いました」

家庭学習支援ソフト「eライブラリ」のドリル学習に取り組みました。学習したい教科や単元を選び、4年生のまとめとして繰り返し学習しました。

家でもぜひ挑戦してみてください。このホームページの左側のバナーからログインできます。



資料1「学校ホームページに掲載された家庭学習支援ソフトの取組」

家庭学習支援ソフトの活用によって、プリント作成等も便利となり、宿題として利用する教師もふえた。また、ホームページから学ぶ機会を授業の中で取り込み、それを家庭でのICT学習に生かす機会もたくさんもてるようになった。

以下は、協力校による小学校3年生のeライブラリを使った授業の様子である。

授業では、旗の間の長さを考え、クラスで話し合いながら1問解き、その後eライブラリを使って応用的な問題を解いていった。応用的な問題では、子どもたちは集中して5分程度eライブラリに取り組んだ。約5分間で、クラス35名の内、6名が全15問を回答し、クラスの半数以上は10問以上回答した。全問回答しても、何度も繰り返し解くことができるため、黙々と問題に取り組む姿がみられた。全問解けていない児童には残りを宿題にすることもでき、自宅においてもeライブラリが有効活用できるようにした。

また、以下は協力校の中学校3年生のeライブラリを用いた授業の様子である。数学の「図形と相似」において、基本コース、標準コース、挑戦コースの3コースに分けて、自分に合った問題を選択してeライブラリの問題演習に取り組むようにした。

生徒たちは、操作方法を聞くと、図形の文章問題に次々と取り組んでいった。数学を苦手としている生徒は、基本コースの比較的簡単な問題に対して、質問をしながら最後まで粘り強く問題を解くことができた。また、数学が得意で、普段の授業では時間をもてあましてしまう生徒たちも、難しい問題に次々と挑戦できることで意欲を持続させることができた。

授業の最後には、「続きは家でもやってみましょう」と言葉がけをして、更なる反復練習を行う姿を期待した。その後、家庭での学習履歴を確認すると、家庭でも積極的に練習問題に取り組む生徒が多数見られた。

この協力校(中学校)では、eライブラリによる家庭学習の利用数が、昨年度については2,186回の利用であったが、本年度、2月中旬までに4,773回となり、約2.2倍に増えた。また、特に定期テスト前に復習として利用する生徒が多



写真5「タブレットで問題を解く」



写真6「何度も繰り返し解く」



写真7「自分で問題を選択する」



写真8「難しい問題に挑戦する」

く、日常的に利用する生徒は全校生徒の約3割に上ることがわかった。その結果、学習状況調査の質問紙における「家で、計画を立てて勉強している」という項目について肯定的な回答した生徒が、4月当初の約5割から1月では7割を越えた。

安城市全体においても、eライブラリを使用した家庭学習の取組が2月の段階で、17万回を越えた。これは安城市の児童生徒がパソコン等を利用して家庭学習をした回数が、平均1人10回を越えていることを意味しており、これからも更に増えていくことが予想される。特に長期休業中の取組が多く、7月、8月、12月、1月にそれぞれ2万回を越える家庭学習の取組が見られた。

以下は、協力校の小学校、中学校それぞれから報告された声である。

「特にテスト前に学習履歴が多く残っており、積極的に取り組んでいる。」
「保護者会で周知したところ、多くの学習履歴が残るようになってきた。」
「小学校2年生が1年生の問題を保護者と学習した履歴が見られた。保護者も一緒に子どもと学習に取り組むきっかけ作りになっている。」
「ほぼ毎日家庭学習に取り組んでいる6年生児童がいる。学校ではあまり積極的に学習に取り組まないが、これによって保護者や本人に励ますことができる。」
「不登校児童生徒にとって、1つ学習の機会が増えたため、教師の子どもへのアプローチの機会が1つ増えた。」
「中学校ではテスト期間中の放課後にコンピュータ室を開放し学習できるようにしたところ、たくさんの学習履歴が見られた。」
「中学校では、特別支援学級の生徒が学年を変えて学ぶ機会ができた。」

また、不登校児童生徒へのアプローチの1つとしての成果も報告された。

安城市教育センターにある安城市適応教室ふれあい学級では、引きこもり状態にあった不登校児童生徒が、学習支援としてeライブラリを家庭で使用したことをきっかけに、学校へ通うステップとして、ふれあい学級に通い、そこでeライブラリを使用する事例がいくつか報告された。以下は、その中の一つの事例である。

生徒Aは、4月から学校に行くことができず、担任は12月になっても一度も会うことができなかった。しかし、学校のホームページから家庭学習ができることを電話で保護者と本人に伝えたところ、自宅のタブレットを使って少し学習ができるようになったと担任は報告を受けた。

そこで、担任が「一緒にタブレットを使って勉強をしよう」と生徒Aに声をかけたところ、学校ではないが安城市教育センターのふれあい学級で生徒Aが来て会うことの約束ができた。

その後、担任は初めて生徒Aと教育センターで会い、一緒にタブレットPCで学習をすることができた。その際、保護者が見守るなか互いに会話をし、今後の生活についても考える機会をもつことができた。

以上のように、ICTを生かした家庭学習が、学校生活にも反映し、効果的にはたらいっている事例がたくさん見られるようになってきている。

4. 本年度の課題と次年度に向けて

(1) 取組内容①

一人一人の居場所と役割があり、自己有用感が高まる学級経営

課題：自己肯定感や所属感、自己有用感の高まりを、長期的な視野で分析し、成果を広げていくこと

本年度、多くの教師が、子ども一人一人の成長を見取り、じっくりと子どもを理解することができ、子どもの自己肯定感等を高めていくことの手応えを感じた。今後は、より長期的に児童生徒の成長を見て、様々な手立てがどのように効果として現れるのか、更に詳しく分析する必要がある。今後も自己肯定感や所属感、自己有用感の変容を分析し、より効果的な手立ての具体を模索していきたい。

(2) 取組内容②

自分の力を発揮し、仲間と学びを深める、主体的・対話的な学びの授業展開

課題：学び合いの授業実践を広げ、共有できるようにすること

仲間とのかかわり合いを通じて学びを深めていく、学び合いの授業づくりについては、子どもの意識の変化を見取り、手立ての有効性を更に具体的にしていく必要がある。温かいかかわり合いのある環境のもと、学び合いの授業づくりの具体的な方法が汎用化され、多くの教師で共有できたり、各教師が部分的に選択して利用したりできるようにする必要がある。実践モデルがいろいろな場所で有効活用できるようなシステムの構築やネットワークづくりが課題である。

(3) 取組内容③

学校と家庭が連携し、ICTを有効利用して個の家庭学習を支援

課題：ICTを活用した家庭学習の更なる普及と、ICT以外の学校と家庭とをつなぐ新たな可能性の模索

ICTを使って家庭学習をしたことが、学校の授業で生かされるような授業の組み立てが見られ、自宅でもICTを使って学習する機会を増やすことができた。ICTを利用した家庭学習の機会は今後も増加すると考えられ、さらに多くの教科や学年で使用できるように汎用化を図りたい。また、同様に、家庭で読書をした児童生徒が授業で生かされる場面を設定したり、家族とのかかわりを題材にした教材を工夫したりするなど、家庭と学校をつなぐ授業づくりや場面づくりを、今後も更に模索していきたい。

(4) 次年度に向けた課題のまとめ

- ・長期的な視野で、自己有用感、自己肯定感等を高める手立てを模索していく
- ・学び合いの授業実践を共有し参考にできるネットワークの強化
- ・ICT活用の更なる普及と、学校と家庭をつなぐ新しい可能性の模索

(様式3)

「主体的・対話的で深い学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の
重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）」

令和元年度委託事業完了報告書【協力校】

都道府県名	愛知県	番号	23
-------	-----	----	----

協力校名	愛知県瀬戸市立下品野小学校
------	---------------

○ 協力校として実施した取組内容

1. 当初の課題

瀬戸市では、令和2年度より全小中学校において、中学校ブロック別の小中一貫教育を進めていくこととしており、各中学校ブロックにおいて準備が進められている。その一環として、今年度は、各中学校ブロックにおいて、共通の「目指す子ども像」や「重点努力目標」を設定した。

推進協力校4校（以下品野ブロック）で設定した目指す子ども像は以下の通りである。

- ・授業や行事など様々な場面で学び合う子
- ・多くの人々と関わりながら地域の一員であるという自覚をもつ子

これまで、品野ブロックでは、「学び合い」を取り入れた授業を軸に、各校において児童生徒の学力向上を目指した取組が行われてきた。各校で成果が得られている一方、基礎基本となる知識技能の定着に課題が見られた。

課題を解決するためには、品野ブロックの4校が目的を共有し、これまで行われてきた「学び合い」の成果を活かしつつ、様々なアプローチの仕方での課題の解決に迫ることが有効であると考えた。

2. 協力校としての取組状況

(1) 基礎基本となる知識・技能の定着と、学び合いを取り入れた授業の推進

品野ブロックにおける「学び合い」の授業を推進するために、平成30年度から先進校である品野中学校の取組を知ることから始めた。授業参観や研究協議会への参加を、学級担任を中心として積極的に行った。令和元年度、本校においては、6月公開日に8名、11月公開日に7名の教員が参観を行った。品野中学校で実際に行われている「学び合い」の授業を目にすることができ、中学校入学までに身につけさせたい資質・能力について考えたり、本校の協働学習について見直したりするよいきっかけとなった。

そして、1年間を通じた取組の検証や児童の実態把握のために、平成30年度は4月と翌年1月から2月にかけて、令和元年度は12月に全国標準学力検査（教研式CRT検査）を実施した。

(2) 家庭学習の充実

小学校では、基礎基本となる知識技能を定着させるために、家庭学習についてのあり方を

検討したり、家庭学習を通じた学習習慣の定着の大切さを保護者に伝えたりした。本校においては、翌日の学習用具準備や、家庭学習への取組を児童が保護者と一緒になって取り組むよう、PTAと協力して平成30年度当初に各家庭へ依頼し、保護者、学級担任がともに連絡帳への確認のサインを行うことを令和元年度も継続した。

(3) 教員の指導力向上

品野ブロックにおいて、学力向上に対する取組を推進するにあたり、各校教員の指導力向上は欠かせない。そこで、各小中学校の学力向上に向けた取組を互いに知り、自校での取組を見直すとともに、小中合同での研修会や研究授業、情報交換、そして乗り入れ授業などを通して、教員の指導力向上を図っていくこととした。

教員の指導力向上に向けたブロック内での合同研修、研究授業参観、乗り入れ授業のうち、本校が中心となってかかわったものは以下に示すとおりである。

平成30年度	令和元年度
＜合同研修＞	
10月15日 大阪市立大空小学校視察	6月27日 福井市足羽小学校、光陽中学校視察
11月26日 品野ブロック合同研修会 講師 上越教育大学大学院学校教育 研究科 教授 水落 芳明	7月12日 プログラミング教育研修会
	11月27日 品野ブロック合同研修会 講師 愛知教育大学教育実践 教授 鈴木 健二
＜研究授業参観＞	
11月26日 授業公開	6月13日 授業公開
2月15日 授業公開	10月10日 授業公開
	2月13日 授業公開
＜乗り入れ授業＞	
11月19、20、29日 本校小学校栄養教諭と中学校技術・家庭科 教員による合同授業（品野中学校1年生）	

3. 取組の成果の把握・検証

取組の成果の把握のために実施した全国標準学力検査（教研式CRT検査）の結果は以下に示すとおりである。

学年・教科別得点率（全国比）				
学年	教科	H30/4	H31/1	R1/12
現6年生	国語	62.7(-8.1)	52.4(-13.2)	65.7(-6.2)
	算数	60.2(-9.3)	51.3(-13.8)	60.2(-7.3)
現5年生	国語	57.0(-7.7)	61.2(-7.7)	69.0(-1.3)
	算数	72.0(-4.6)	65.1(-8.1)	55.0(-8.9)

【国語】学年・観点別得点率 (全国比)					
学年	教科	観点	H30/4	H31/1	R1/12
現6年生	国語	関心・意欲・態度	66.2(-0.4)	66.5(-4.9)	64.7(-2.2)
		話すこと・聞くこと	72.3(-5.9)	72.8(-8.9)	74.0(-4.1)
		書くこと	61.3(-8.3)	50.3(-7.0)	66.7(-7.0)
		読むこと	53.1(-9.8)	35.8(-20.6)	57.8(-6.3)
		言語	63.7(-9.3)	51.3(-16.5)	63.7(-7.9)
現5年生	国語	関心・意欲・態度	70.6(+0.4)	59.9(-6.9)	68.5(-3.5)
		話すこと・聞くこと	75.1(-3.7)	71.2(-4.6)	78.6(-1.3)
		書くこと	55.0(-6.2)	61.7(-2.3)	61.5(-2.1)
		読むこと	40.7(-11.2)	52.5(-13.0)	67.2(+0.1)
		言語	57.0(-10.0)	58.7(-11.6)	67.0(-2.2)

【算数】学年・観点別得点率 (全国比)					
学年	教科	観点	H30/4	H31/1	R1/12
現6年生	算数	関心・意欲・態度	68.1(-0.4)	62.8(-7.3)	70.4(-4.3)
		数学的な考え方	55.4(-10.8)	42.2(-14.5)	49.8(-8.6)
		数量や図形についての技能	66.1(-8.4)	57.9(-13.3)	61.8(-9.4)
		数量や図形についての理解	58.7(-9.2)	53.7(-13.7)	69.0(-4.0)
現5年生	算数	関心・意欲・態度	71.5(-0.5)	65.1(-4.5)	62.1(-7.0)
		数学的な考え方	65.0(-6.5)	51.4(-9.3)	43.3(-12.6)
		数量や図形についての技能	71.2(-3.7)	63.4(-5.9)	65.3(-5.3)
		数量や図形についての理解	75.6(-2.9)	59.3(-9.0)	57.6(-8.9)

国語の得点率に着目すると、現5、6年生ともに平成30年4月に比べてポイントが上昇している。観点別に見ると、現6年生は各観点で、現5年生は「読むこと」「言語に関する知識・理解・技能」で大きくポイントが上昇している。

全国得点率との比較をすると、各学年の国語においてポイント上昇が多く見られる。

算数の得点率に着目すると、現6年生についてはポイントに変化がなかったが、現5年生が平成30年4月に比べて大きくポイントが下落している。観点別に見ると、現6年生は「数量や図形についての理解」で大きくポイントが上昇している。反面、現5年生については、「数学的な考え方」「数量や図形についての理解」で大きくポイントが下落している。

全国得点率との比較をすると、6年生の「数学的な考え方」「数量や図形についての理解」においてポイント上昇が見られるが、5年生においてはポイントの下落が著しい。

(1) 基礎基本となる知識・技能の定着と、学び合いを取り入れた授業の推進

品野ブロックで学力向上を掲げ、目の前の児童生徒を見つめ直し、何が欠けていて何が必要かということを全教職員で検討する機会を得たことは大きな成果である。また、学力向上のための授業改善に向け、本校においても継続して取組を行ってきた。

特に、「学び合い」の視点から、国語の授業において根拠に基づいて自分の考えをもち、伝え合う授業を行ってきた（資料1）。取組に際しては、前年度末に課題として挙げた学習規律を徹底させ、児童相互の関わりを促す環境を整えた。それは、各学年の国語「読むこと」における得点率上昇の一助となっていると考える。

また、国語の授業において言語に関する知識・技能の定着に向けてフラッシュ教材を活用したり、デジタル教科書のコンテンツを活用したりしてきた。それは、各学年の「言語に関する知識・理解・技能」における得点率向上の一助になっていると考える（資料2）。

令和元年12月に実施した学校評価アンケートでは、「学力向上、基礎基本の定着」に対する回答のうち、約71%が「身に付いている」「やや身に付いている」であった。保護者の多くに、本校における基礎学力定着に向けた取組を評価していただいた。また、本校における「ICT活用、学び合い」に対する回答のうち、約71%が「よい」「ややよい」であった。この設問については、平成29年度と比較して10ポイント以上増加しており、保護者の多くに、本校の取組を評価していただいたと考えられる。

しかし、算数における学力向上を図ることができなかったことは大きな課題である。特に、5年生は少人数指導を取り入れ、児童の躓きを捉えて指導を行う計画であったが、児童の実態把握がうまくできず、適切な指導を行うことができなかったことが要因であると考えられる。

（2）家庭学習の充実

家庭学習の充実を目指すために、家庭と協働していく方針を今年度も継続した。令和元年12月に実施した学校評価アンケートでは、「家庭学習の習慣が身に付いている」という設問に対して児童の80%、保護者の66%が「十分身に付いている、概ね身に付いている」と回答した。連絡帳にサインを行うという取組も、8割強程度の家庭に協力していただけており、取組として定着をしている。

家庭学習課題として、国語の漢字学習、算数の計算学習を中心として取り組んだ。漢字学習に継続して取り組んだことは、各学年の「言語に関する知識・理解・技能」における得点率向上の一助になっていると考える。

（3）教員の指導力向上

実際に各校を行き来し、その取組を目にすることは本校の教員にとってよい刺激となった。特に、本校が初任校となる教員や、中学校経験のない教員にとっては、義務教育を終える段階までに身に付けさせたい資質・能力を明確にもつ機会となった。

また、校内においても積極的に互見授業の機会や研究協議会を設定し、指導力向上に努めた（資料3）。



資料1 国語における「学び合い」



資料2 デジタル教科書での漢字学習



資料3 研究協議会の様子

4. 今後の課題

(1) 基礎基本となる知識・技能の定着と、学び合いを取り入れた授業の推進

各学年の国語において、基礎基本となる知識・技能として定義したものは「漢字の読み書き」「文章を読むこと」「文章を書くこと」である。各学年での授業において、それを念頭に置いた取組がなされたことは、今回の学力定着という成果に結びついたと考えられる。また、基礎基本となる知識・技能を明確にして定着できたことにより、「学び合い」も効果のあるものとなったと考えられる。反面、算数においては基礎基本となる知識・技能を「計算の技能」としか定義できなかった。いわゆる計算問題の反復練習に取り組んだものの、児童の実態に即したのではなく、各観点、領域における基礎基本となる知識・技能を定着させることができなかった。そのため、「学び合い」も効果のあるものとして設定することができなかった。

今後は、児童の実態を適切に把握したうえで、身に付けさせたい事柄を明確にして指導を行う必要がある。

(2) 家庭学習の充実

家庭学習の充実を目指すために、家庭と協働していく方針を今年度も継続したことは、家庭・地域との協働を目指すうえで大きな成果であった。連絡帳を相互に確認する取組、各家庭が、児童の学力を含む学校生活に関心をもつための情報発信等を積極的に行い、定着が見られたことは大きな成果であった。家庭学習の充実は、前述の国語における学力定着という成果に結びついたと考えられる。

(3) 教員の指導力向上

教員経験年数が5年未満の学級担任を多く抱える本校において、相互に授業を見合う機会を設定できたことは、大きな意義のあることであった。品野ブロック内の各校において授業を参観したり、県外の先進校を視察し、その取組を目の当たりにしたりしたことは、各教員の授業に対する意識向上の一助となった。

(様式3)

「主体的・対話的で深い学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の
重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）」

令和元年度委託事業完了報告書【協力校】

都道府県名	愛知県	番号	23
-------	-----	----	----

協力校名	愛知県瀬戸市立品野台小学校
------	---------------

○ 協力校として実施した取組内容

1. 当初の課題

本校の全国学力学習状況調査の結果から、これまでと比べ学力の二極化が広がっている傾向がみられる。領域別では、国語Aの「書くこと」や算数Aの基本的な問い、四則計算等は正確に答えることができていた。反面、国語の言語についての知識・理解、算数Bの表やグラフからなど多くの情報を整理して答えることなどは全国平均を下回っていた。解答結果からは、最後の問題にたどり着けない児童が少なからずいた。文章の読み取りが遅いことや、考える時間が足りないことなどが考えられる。

学習状況に対する児童の回答を見ると、学校の授業時間外（平日）における学習時間は30分未満から全くしない児童の割合は全国平均より多い。学校が休みの日においても、1時間未満から全くしない児童の割合は全国平均より上回る結果となった。また、「学校で好きな授業があるか」という質問に対し、そう思う・どちらかといえばそう思うと回答した割合は全国平均を若干上回ってはいるものの「先生は授業やテストで分かるまで教えてくれるか」という質問に対して、当てはまらない・どちらかといえば当てはまらないと回答した割合は全国平均よりも多い結果となった。

以上のことから、個に応じたきめ細かな指導が必要であること、各教科において、学習に取り組む意欲が湧いてくるような学習問題の提示のしかたや分かりやすい授業実践を教員間で共有すること、一人ひとりの児童が粘り強く取り組めるような支援の在り方を探り出していくことなどが考えられるため、以下のように課題を定めた。

- (1) 基礎基本となる知識・技能の定着に課題がある。
- (2) 家庭における学習への取り組みに課題がある。
- (3) 関心・意欲を引き出せるような授業改善に取り組む必要がある。

2. 協力校としての取組状況

(1) 基礎基本となる知識・技能の定着に向けて

① 業前の時間を活用した朝の活動、がんばりテスト(漢字・計算)の設定

朝の活動20分間では、朝読書、読み聞かせ、外国語活動と組み合わせて、基礎基本の内容である漢字・計算の内容にも取り組んだ。加えて、各学期に学習のまとめとして、がんばりテスト(漢字・計算)を行った。満点賞(100%)、がんばり賞(90%)の児童には賞状を授与し、基礎基本の定着を重視した学習活動を通して、確かな学力の定着を図った。

② 教科担任制を導入し、専門教科指導の実施

4、5、6年生において、書写、社会科、理科、音楽科、家庭科、体育科で教科担任制を実施し、専門性を持つ教師による指導で子どもたちの興味・関心をかきたて、授業に引き込むことができるように取り組んだ。

③ 教師の授業改善・指導力向上のために

指導方法の工夫改善を図るため、品野ブロックで開催される研究授業へ積極的に参加し、職員間で情報を共有した。学校公開日での訪問、研究授業、協議階へ参加することができ、教師の指導力の向上につなげるためのきっかけとなった。

(2) 家庭における学習への取り組み向上に向けて

家庭教育の充実として、右のように学年通信等を活用し、情報発信を行った。

宿題への取り組みを促したり、確認を行ったりすることを家庭へ依頼し、確認後は必ずチェック表や連絡帳に確認のサインを行うことを家庭へ依頼した。

お願い

- ・長い夏休みです。お子さんと、時間や取り組む内容など、計画を一緒に立てて、学習やお手伝いに取り組むことができると幸いです。
- ・日誌と計算ドリルの〇付けにご協力ください。お子さんの得意不得意が分かりますので、ぜひ、定着するまで復習していただけたらと思います。
- ・計算がすらすらできるようになるまで、根気よく、毎日計算カードの練習を続けさせてください。寄り添ってみると、苦手なカードや指に頼っているカードなどが分かります。繰り返し練習すれば、どの子もすらすらできるようになります。よろしくお願いします。

② 家庭学習への取り組みが芳しくない場合は、保護者・児童ともに取り組みを促した。

③ 家庭読書期間を設定し、家庭での読み聞かせなどのきっかけ作りを通して読書に親しみを持てるように促した。

(3) 教員の授業改善に向けて

① オープンスクールの学校施設と小規模校の特性から、児童の個性を伸ばさせつつ社会性やコミュニケーション能力の向上に努める。小規模校のメリットを生かし異学年交流授業、教科担任制などの授業に取り組んだ。

② 各教科の学習活動において「学び合い」の活動を取り入れ、能動的に学ぶ児童の育成をめざし、どのような場面で取り入れることができるのかを追究していく。学習活動の終わり(1時間、一日、単元など)に振り返りの場面を設定し、感じたことや考えたことを伝えた。

③ 国語科の学習指導を中心に、「聞く」「話す」「読む」「書く」力の育成を図る。また、国語科以外の教科等においても、教科の特質に応じて学び合う(伝え合う)活動を積極的に取り入れた。また、学級内だけでなく、児童会活動や委員会活動、縦割り班活動、学校行事等、さまざまな機会を利用し、自分の気持ちや考え・気づきを伝えあう場面を設定した。

④ 教科、総合的な学習の時間、行事など様々な学習活動の中で、いろいろな立場や年齢の多くの人との関わり、「相手を思いやる心」「相手の心遣いに感謝する心」「相手の喜ぶ姿に成就感を感じる心」などを育み、お互いを理解して協調する態度を育て、より好ましい人間関係の育成を目指すともに、コミュニケーション能力の育成を目指した。

⑤ 教科研究、特別支援教育、食育等、校内研修会、伝達講習会等を積極的に行った。

⑥ 品野中学校における授業や研究協議会へ参加する。それを通して小中一貫教育の観点から中学生の実態を把握し、小学校において身に付けさせたい学力を見つめなおすことによって、授業改善の一助とした。

3. 取組の成果の把握・検証

(1) 教研式標準学力検査CRT

平成30年度と令和元年度で関心・意欲の観点別得点率を比べると、国語・算数ともに3学年ともに向上していた。観点別の得点率を全国との比較をしても平成30年度と比べると多くの観点で向上している。各学年の担任のきめ細かな指導と各教科の授業で興味・関心を高める授業の工夫が結果となって現れたのではないかと考える。

CRT結果一覧 国語

H30年度					R1年度							
3年生	国語への関心話す・聞く能く書く能力				読む能力	国語についての知識・理解・技能						
学年	88.3	76.7	52.5	68.6	79.9	4年生	国語への関心話す・聞く能く書く能力					
学年	68.3	79.2	64.8	73.9	78.5	学年	68.3	79.2	64.8	73.9	78.5	
全国	73.2	77	54.2	57	68.6	全国	66.8	75.6	62.2	67.3	70.3	
4年生	国語への関心話す・聞く能く書く能力				読む能力	国語についての知識・理解・技能						
学年	53.4	84.2	79.8	71.4	70.4	5年生	国語への関心話す・聞く能く書く能力					
学年	66.8	75.8	64.1	65.5	70.3	学年	71	83.5	62.5	71.3	65.8	
全国	66.8	75.8	64.1	65.5	70.3	全国	72	79.9	63.6	67.1	69.2	
5年生	国語への関心話す・聞く能く書く能力				読む能力	国語についての知識・理解・技能						
学年	58.7	81.7	61.6	75.4	64	6年生	国語への関心話す・聞く能く書く能力					
学年	66.9	87.4	88.8	72.7	76.3	学年	76.4	87.4	88.8	72.7	76.3	
全国	71.4	80.7	57.3	56.4	67.8	全国	66.9	78.1	73.7	64.1	71.6	
6年生	国語への関心話す・聞く能く書く能力				読む能力	国語についての知識・理解・技能						
学年	61.6	68.6	68	59.4	66.1	<table border="1"> <tr> <td>全国平均よりも↑</td> </tr> <tr> <td>全高平均よりも↓</td> </tr> </table>					全国平均よりも↑	全高平均よりも↓
全国平均よりも↑												
全高平均よりも↓												
全国	66.7	75	76.1	62.5	71.2							

CRT結果一覧 算数

H30年度					R1年度							
3年生	算数への関心数学的な考え数量や図形に				数量や図形についての知識・理解	4年生	算数への関心数学的な考え数量や図形に					
学年	79.3	70.6	79.8	85.1	4年生	74.3	59.3	81.5	66.9			
全国	72.9	67.9	74.8	77.7	全国	69	54.3	67.5	63.3			
4年生	算数への関心数学的な考え数量や図形に				数量や図形についての知識・理解	5年生	算数への関心数学的な考え数量や図形に					
学年	50.5	63.3	76.5	65.2	5年生	59.8	43.5	70.2	60.3			
全国	69.6	60.7	69.3	68.3	全国	69.1	55.9	70.6	66.5			
5年生	算数への関心数学的な考え数量や図形に				数量や図形についての知識・理解	6年生	算数への関心数学的な考え数量や図形に					
学年	66.8	56.9	83.8	68.2	6年生	84.8	72.2	79.6	75.2			
全国	70.1	56.7	71.2	67.4	全国	68.7	58.4	71.2	73			
6年生	算数への関心数学的な考え数量や図形に				数量や図形についての知識・理解	<table border="1"> <tr> <td>全国平均よりも↑</td> </tr> <tr> <td>全高平均よりも↓</td> </tr> </table>					全国平均よりも↑	全高平均よりも↓
全国平均よりも↑												
全高平均よりも↓												
学年	66.8	62.4	77.5	73								
全国	68.8	58.4	72.8	73.4								

(2) 教科担任制について

児童へのアンケートから教科担任制で行う授業について、「わかりやすい」「どちらかという」とわかりやすい」と答えた児童が100%となった。反面、質問したり、発表したりするときには躊躇する児童がいた。授業展開に、話し合いの場や発表する場面を設定するなど工夫が求められる。また、各教科に興味を持って取り組んでいる児童が多い中、嫌いになっている児童も若干名いることは、忘れてはいけない。

<教科担任制についてのアンケート>

①教科担任で行う授業は、分かりやすいですか	4年生	5年生	6年生	全体
ア よくわかる	91%	67%	83%	80%
イ どちらかというとわかりやすい	9%	33%	17%	20%
ウ あまり変わらない	0%	0%	0%	0%

②教科担任で行う授業では、質問しやすいですか。	4年生	5年生	6年生	全体
ア とてもしやすい	55%	17%	33%	34%
イ どちらかといえばしやすい	27%	25%	42%	31%
ウ あまり変わらない	18%	33%	17%	23%
エ どちらかといえばしにくい	0%	8%	0%	3%
オ とてもしにくい	0%	17%	8%	9%

③教科担任制では、集中して取り組みましたか。	4年生	5年生	6年生	全体
ア とても集中して取り組めた	36%	8%	58%	34%
イ どちらかといえば集中して取り組めた	64%	42%	33%	31%
ウ あまり変わらない	0%	42%	8%	23%
エ あまり集中して取り組めなかった	0%	8%	0%	3%
オ 集中して取り組めなかった	0%	0%	0%	9%

④教科担任制で、自分の考えを発表できましたか。	4年生	5年生	6年生	全体
ア 積極的に発表できた	18%	8%	42%	23%
イ どちらかといえば発表できた	64%	42%	25%	43%
ウ あまり変わらない	18%	25%	33%	26%
エ どちらかといえば発表できなかった	0%	17%	0%	6%
オ 発表できなかった	0%	0%	0%	0%

⑤以前よりも好きになりましたか。	4年生	5年生	6年生	全体
ア とても好きになった	61%	20%	45%	39%
イ 少し好きになった	24%	33%	45%	36%
ウ 以前と変わらない	15%	40%	10%	23%
エ 少し嫌いになった	0%	5%	0%	2%
オ 嫌いになった	0%	2%	0%	1%

(3) がんばりテスト 賞状獲得

各学年のがんばりテスト（国・算）の賞状（正答9割以上）の獲得率では、学年が上がるにつれ獲得率の低下傾向が見られた。学習内容（新出漢字・計算のきまりなど）の難易度が上がっているためだと考える。しかし、前年度との比較、経年比較において獲得率が次学年や次学期には向上する傾向が多く、学年で見られた。教師のきめ細かな指導や家庭学習の習慣の定着によって、基礎基本の習得に向けて努力する態度が身につけているのではないかとと思われる。学校評価アンケートの中にもがんばりテストを続けてほしいという保護者の意向（約9割：とても思う＋そう思う）もあるため、次年度も継続して、学習習慣など強化につなげられるように取り組んでいきたい。

H30年度

	1年生 13人		2年生 20人		3年生 11人		4年生 13人		5年生 13人		6年生 14人	
	国	算	国	算	国	算	国	算	国	算	国	算
1学期	100%	100%	70%	65%	82%	82%	85%	69%	77%	15%	86%	64%
2学期	100%	100%	60%	85%	82%	91%	69%	77%	71%	43%	79%	86%
3学期	92%	100%	84%	95%	82%	82%	85%	92%	85%	23%	71%	71%

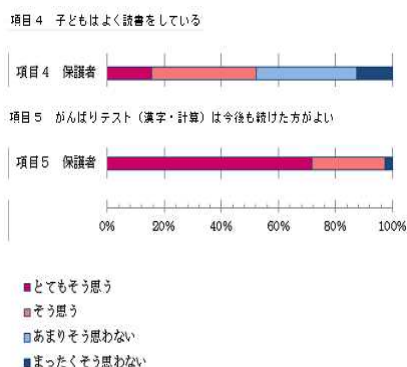
R1年度

	1年生 19人		2年生 12人		3年生 18人		4年生 11人		5年生 13人		6年生 13人	
	国	算	国	算	国	算	国	算	国	算	国	算
1学期	80%	85%	100%	92%	89%	95%	100%	55%	62%	62%	92%	92%
2学期	58%	53%	100%	83%	100%	89%	73%	64%	75%	50%	58%	58%

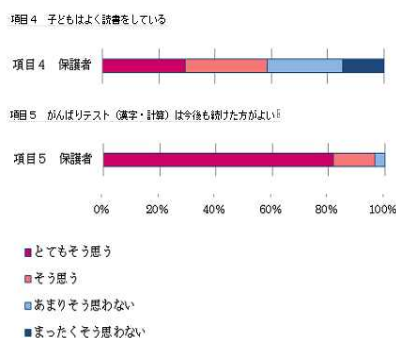
(4) 家庭における学習への取り組み向上にむけた読書活動

読書月間の取り組みでは、家庭読書を勧め、各家庭にも協力を求めた。例えば、読み聞かせを家族間相互で行うなど様々な呼びかけを行った。その結果、学校評価のアンケートで「子どもはよく読書をしている」と答えた保護者の割合が平成29年度は約5割だったが、平成30年度、令和元年度は約6割近くに向上した。活字離れが世間で騒がれている中、家庭を巻き込んだ読書活動を今後も継続していきたいと考えている。

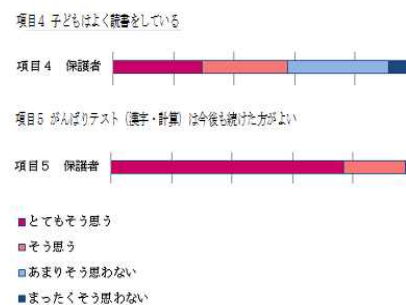
H29年度 保護者アンケートより



H30年度 保護者アンケートより



R1年度 保護者アンケートより



4 今後の課題

(1) 基礎学力の定着をめざして

基礎学力を定着させるため各学期にがんばりテスト(漢字・計算)を実施してきた。個人差があるものの、多くの児童が手応えを感じているのではないかと思う。きめ細かな指導を進める上で、児童が自分自身で限界の壁を作らないよう教師の言葉かけや家庭からの支援をさらに厚くし、何事にも挑戦することができる児童を育てていきたい。今後も、主体的・対話的で深い学びにより近づけられるよう授業の進め方や学んだことを活かすことができる学習を追究していきたい。さらに、学習習慣を確立させる手立てとして話の聞き方の基本姿勢(①動かないで、②目を見て、③うなずき、④くり返し、⑤褒める、⑥同意する(相違点を述べる))を全校で統一し、落ち着いて人の話を聞くことができる児童の育成につなげたい。

(2) 学習習慣の定着に向けて

これまでの全国学力学習状況調査から見えた課題「家庭での学習は30分以下・しない状況」は本校の課題の課題でもある。課題の量を「学年+10分間」とするなど持続可能な児童の集中力を念頭に置き、楽しそう、取り組んでみたい、やってみたいと思えるような課題の開発を職員間で共有できればと考える。

また、今年度も本校職員全体で読書活動に力を注いだ。保護者アンケートから昨年度よりも多くの方に読書に親しんでいる子どもたち姿が見られるとの回答を得た。読書に親しむことができる恵まれた環境にあるので今後も継続していきたい。読書習慣の定着により読解力を向上させるとともにテレビやゲームをする時間をセルフコントロールし、主体的に家庭学習に取り組む姿勢を身に付けさせたい。

(3) 教員の更なる指導力向上をめざして

今年度も取り組んだ教科担任制は、児童へのアンケート結果からわかりやすい授業づくりのヒントを得ることができたと考える。専門的教養をさらに高め、何よりも自信をもって子どもたちに指導する教員の姿は児童に大きな影響を与えることが期待される。

自分の思いを発表する場面の設定も功を奏していると思われる。全校児童が一斉に下校する前に全校児童の前でスピーチする場面を設定したり、朝の会や帰りの会の中でも気づきを発表する場を設定したりする学年が多く見られる。発表ができるまでには、担任のきめ細かな支援が必要にはなるが、自分の思いを伝えることができる活動は今後も継続していきたいと考える。

令和2年度より、新学習指導要領の完全実施となる。瀬戸市でも小中一貫教育が本格的に始動する。小中・小小の交流をさらに深め、小中学校授業の乗り入れや、研究授業、研究協議、中学校ブロックでの共同研修などの参加などさらに深めていきたい。そして、小中一貫教育を通じて「瀬戸で学んでよかった」「瀬戸で育ててよかった」「瀬戸で生きてよかった」という瀬戸市の教育基本理念の実現につなげていきたい。そのためにも、本校児童やこの地区の子どもたちがどんな力をつけるとよいのか、どのような方法でアプローチすると有効なのかなど、教員間でいつでも話題にできる環境作りをめざしていきたい。また、学力向上につながる研修に参加できる機会を数多く作るように努めていきたい。

(様式3)

「主体的・対話的で深い学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）」

令和元年度委託事業完了報告書【協力校】

都道府県名	愛知県	番号	23
-------	-----	----	----

協力校名	愛知県瀬戸市立掛川小学校
------	--------------

○ 協力校として実施した取組内容

1. 当初の課題

本校の最近5年間の全国学力・学習状況調査の結果を見ると、国語、算数ともに全国平均と同程度かやや上回る正答率であった。しかし今年度は、算数は平均値をやや上回る正答率だったものの、国語については全国平均を0.9点、下回った。領域別に見ると、「話すこと・聞くこと」「読むこと」はほぼ平均値であるが、「書くこと」が極端に低い正答率であることがわかった。また算数についても、計算の仕方を説明したり、資料を選んだ理由を述べたりといった問題の正答率が低かった。基礎基本の充実を図るとともに、筋道を立てて文章で表現したり、適切に要点を捉えてまとめたりする能力の育成が必要であることが明らかとなった。

本校は全校児童26名の小規模校であり、3・4年、5・6年は複式学級である。しかし、国語や算数については、少人数の特性を生かし、個に応じたきめ細やかな指導を心掛けて、学年ごとの授業を実施している。しかし学年によっては、個人差が大きいため、個別指導による基礎基本の定着を図るなど、個々の力を底上げする必要があると考える。また、気心知れた少人数のよさを生かして、学び合い学習を積極的に取り入れ、互いに刺激し合ったり、切磋琢磨したりすることで、対話的で深い学びにもつなげていくことができると考える。

2. 協力校としての取組状況

(1) 基礎基本となる知識・技能の定着と学び合いを取り入れた授業の推進

① 業前の時間を活用した掛川タイムの設定

業前の時間（8:35～55）に、基礎基本の内容である漢字・計算学習を主とした時間を設定し、全校で取り組んだ。

② 漢字コンクール・計算コンクールの実施

毎学期末に、漢字、計算コンクールを行った。各学年の基礎基本の問題を中心に50問程度出題し、全員が合格点である90点以上取れることを目指した。満点の児童にはパーフェクト賞、90点以上の児童には合格証を渡した。また不合格の児童には、もう一度反復練習に取り組みさせて、再テストを実施した。

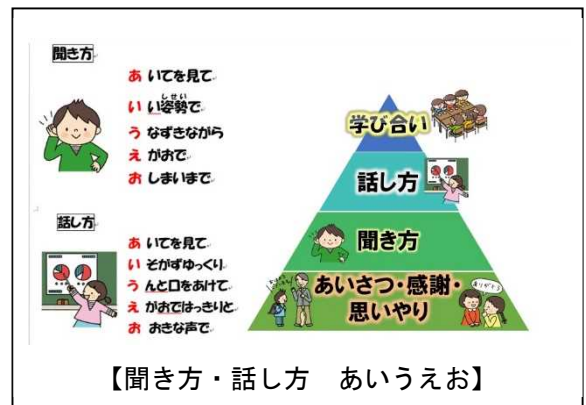
③ 学び合いを取り入れた授業の実践

体験的・問題解決的な学習を積極的に取り入れ、学び合いを柱に授業を展開することを心掛け

た。また研究授業や研究協議会を行い、相互に力量向上を図った。

④ フレンドタイムでの取り組み

毎週水曜日にフレンドタイムを設定し、アドジャンを実施した。アドジャンとは、「アドジャン」のかけ声とともに出された指の数を合計し、その本数と同じ数字に与えられたお題について、グループで話し合うものである。まずはそれぞれの意見を出し合い、その後のフリータイムで詳細について語り合った。その際、「話し方・聞き方あいうえお」を意識させて取り組ませた。



(2) 家庭学習の取り組み向上に向けて

家庭との連携を図りながら、児童の学習習慣が確立するよう、次のことを行った。

- ・ 毎日、できるかぎり同じ様式で、同じ時間でできるような宿題を出すように心がけ、家庭学習が生活習慣の一部として定着するようにした。
- ・ 宿題のチェック表や連絡帳への確認のサインを家庭へお願いした。

(3) 教員の授業改善に向けて

① 現職教育委員会による取り組み

- ・ 授業研究を年に2回行った。授業後には基礎学力定着だけでなく、深い学びにつなげていくための授業づくりを主テーマとした協議会を行った。
- ・ 学び合い学習を深めるために、話し合い活動を活発化する方法について教員一人一人が1年間自主研修に励み、授業で実践した。その結果を現職教育委員会で発表し、情報の共有化を図った。また、次年度に向けて全校で取り組んでいくことをまとめた。

② 品野中ブロック公開授業への参加

品野中ブロック内で実施される公開授業や学校公開日の日程を連絡し合い、4校の教員が各校の公開授業や学校公開に参加した。また可能な限り、授業後に行われた研究協議会へも参加した。

3. 取組の成果の把握・検証

(1) 基礎基本となる知識・技能の定着と学び合いを取り入れた授業の推進

- ・ 業前の時間を活用した朝学習（掛川タイム）や、学期末の漢字・計算コンクールの事前指導、事後指導で漢字、計算の力を身につけることができた。また、主体的に漢字や計算の反復練習に取り組むコンクールに臨む児童も多く見られ、基礎的な力の向上の促進につながった。
- ・ 12月、1月に標準学力検査CRTを実施した。漢字・計算コンクールの成果の検証として、「漢字を正しく覚えて使うこと」「数と計算」の領域に注目してみると、得点率は以下のような結果だった。（今年度、1年生は在籍児童なし）

領域	学年	2年	3年	4年	5年	6年
漢字を正しく覚えて使うこと		86.7%	62.1%	87.3%	82.2%	82.8%
数と計算		91%	67.9%	75.8%	75%	66.3%

この結果をみると、漢字については全体的に力の定着は見られるものの、3年生は個人差が大きく、得点が平均化されたため、他の学年と比較して低い得点になったと考えられる。計算については基礎基本の問題は解けているものの、表やグラフ、資料などから必要な情報を自分で捉え、それを使って計算をするような設問において得点が低く、領域全体としても得点が伸びなかったと考えられる。

- ・ フレンドタイムでの実践や学び合いの学習を通して、児童は自分の考えを発表する、友達の意見をうなずきながら聞く、困っている友達を助けるという姿勢が身に付いた。この姿勢は、互いを認め合い、大事にし合う気持ちを育成することにもつながった。

(2) 家庭における学習への取り組み向上に向けて

- ・ 「学校評価のための保護者アンケート」では、「お子さんは、家庭できちんと家庭学習（宿題など）に取り組んでいる」という項目において、80%の保護者が「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と回答した。
- ・ 宿題に取り組まないことや連日にわたり宿題を忘れることがずいぶん少なくなった。これは宿題に対して「取り組むべきこと」という児童の意識向上であり、家庭での学習習慣の定着の表れだと考える。

(3) 教員の授業改善に向けて

① 現職教育委員会による取り組み

- ・ 6月には、愛知教育大学の鈴木健二先生をお招きして、2年生の国語の研究授業・研究協議会を行った。すべての子どもが意欲的に参加し、学力が向上するための授業づくりについて教えていただいた。漢字の学習を例にすると、漢字の習得するステップを捉えること、児童自身が自分で学んでいく姿勢を身に付けさせること、「とめ」「はらい」など細かいところにこだわりすぎず、骨組みがあっていればよいというようなおおらかさを持つことなどをお話いただいた。とても具体的に教えていただけたので、すぐに実践できそうなことばかりだった。また、品野中ブロックの小中学校の先生方にも参加していただき、異校種も含めて、他校での実践を知るよい機会となった。

10月にはスクールセミナーにおいて、5・6年生の音楽の研究授業・研究協議会を行った。瀬戸市教育委員会指導主事の池田有希先生、瀬戸市教科指導員の木股千恵子先生をお招きして、「協働して音楽活動をする楽しさを味わいながら、確かな力を身に付けていく子の育成」をテーマに話し合った。子どもたちはのびのびと意見が言える雰囲気の中、個人で歌詞からイ



メージを膨らませたことをもとに、どのように工夫したらよいかをしっかりと話し合った。深い学びにするためには、どのように話し合い活動を展開するとよいかをお二人の先生方にご指導いただいた。また、協議会の中で出された日ごろの音楽の指導における課題についても助言していただき、その後の授業に生かすことができた。



② 品野中ブロック公開授業への参加

品野中ブロック内で実施される公開授業や学校公開日の日程を連絡し合い、学校内で調整をして1名は参加するようにした。校内の調整がつかず、全てに参加することはできなかったが、10月31日の品野台小学校での国語、11月1日の品野中学校での道徳、11月27日の品野台小学校での国語、それぞれで実施された公開授業を本校の教員が参観した。また、授業後に行われた研究協議会へも可能な限り参加した。小規模の本校は教員数も少なく、互いの授業を見合ったり、授業について話し合ったりする機会も限られるため、たいへん貴重な時間となった。

4. 今後の課題

(1) 基礎基本となる知識・技能の定着と学び合いを取り入れた授業の推進

- ・ 漢字、計算など基礎基本となる知識・技能については、朝学習やコンクールの実施などで、全体的に見ればかなり力がついてきた。しかし個人差があり、なかなか合格点に到達しない児童もいる。ただ反復練習に取り組みさせるのではなく、児童の現状や特性を踏まえて、個別の目標を設定したり、練習方法を指南したりするなど、同じ児童であってもその状況に応じた適切な助言や指導を考えていく必要がある。そのために教師間で児童の情報を共有し、共通認識のもと、複数の目で一人ひとりの児童を見て、指導していく。
- ・ 定期的に「フレンドタイム」を設け、アドジャンを継続したことで、児童間に友好的な話し合いの雰囲気は定着し、授業でも「話し方・聞き方あいういえお」を守って話し合いをすることができた。話し合いの土壌は出来上がりつつあるので、対話的で深い学びへと発展させるために、自分の意見の理由や根拠を明らかにして話すことを指導していく。
- ・ 学び合いを取り入れた授業作りを工夫し、児童の意欲を高めることができた。しかし、学習の導入としての意欲は高まっても、その後の学習の継続を促すような意欲の高まりとなると、十分とは言えない。学び合い学習を深めるためには、基礎基本となる知識・技能が備わったうえで、自分の意見を持つことがスタート地点となる。知識・技能の蓄えは、低学年から時間をかけていかなければならないことも多い。学年で段階的に取り組むべき内容を考え、長期的な視野に立つてこれからも研究を進めていく。

(2) 家庭学習の取り組み向上に向けて

アンケートを見ると、「そう思わない」と回答されている保護者も数パーセントではあるが見られる。宿題を忘れることはないものの、家庭では自主的ではなく促されてようやく取り組んでいるという現状も考えられる。学習の習慣化は、児童自身の意識と大きくかわることから、根気強く指導を継続していく。

(3) 教員の授業改善に向けて

実際に各校を行き来し、その取り組みを目にすることは本校の教員にとってよい刺激となった。特に中学校での研究授業は、小中の系統性や教科の専門性を生かした授業の展開、児童生徒に対する理解の深まりなど、得られるものが多かった。しかし「学力」や「学び合い」の定義や取り組みについては、各校または個人で解釈が異なり、その調整の難しさを感じた。学校規模の相違や地域性など、各校の特性が独特な品野ブロックでは、小中一貫教育もさまざまな方向性を秘めているが、今回取り組んできた学力向上に向けた取り組みを今後も継続していきたい。

(様式3)

「主体的・対話的で深い学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）」

令和元年度委託事業完了報告書【協力校】

都道府県名	愛知	番号	23
-------	----	----	----

協力校名	愛知県瀬戸市立品野中学校
------	--------------

〇 協力校として実施した取組内容

1. 当初の課題

26、27年度の愛日地方事務協議会の委嘱を受け研究した時の成果はあった。しかし、愛知県の公立高校入試問題を解きこなす力までは身に付いていない現状があり、基礎基本の定着をはじめ、生徒の「聞く、聴く、訊く」力が身に付いていないと感じられる場面もある。生徒の学校アンケートからは、授業で話し合い活動が多く行われていると認識している生徒が多いことはわかった。しかし、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていないと感じられ、教員の話聞く、他の生徒の意見を聞くことができないことがその要因の一つとなっている。また、基礎基本の定着という観点から、家庭学習についての取組にも改善の余地がある。

2. 協力校としての取組状況

(1) 現職教育の充実について

① 学力定着の先進校視察

6月27日（木）に品野中学校、品野台小学校、下品野小学校、掛川小学校からの代表者7名による福井市立小中学校視察を行った。福井市立足羽（あすわ）小学校、福井市立光陽（こうよう）中学校の順に視察を行い、それぞれの学校で授業参観と学校長との懇談を行い、品野地区の学力定着に向けた教育に活かすことのできる取組について学んだ。とくに、「光陽中学校区家庭教育スタンダード」は参考になり、家庭における学習面のみならず、「勤勉性・自主性」「社会性」「生活」「安全」にまで踏み込んだ内容であった。これを毎年PTAとともに見直していき、子どもたちにとってより良い環境を整えていく。これは、今年度より瀬戸市が推進している小中一貫教育につながるものであるとともに、家庭学習の工夫に活かしていくことができる。



② 授業力の向上

品野地区のそれぞれの小中学校にスーパーバイザーとして愛知教育大学教授の鈴木健二氏

をお招きし、研究授業および研究協議会を実施した。研究協議のテーマは、本校現職教育のテーマである「自分メディア力の育成」とし、教員の資質、授業力の向上が学力の向上につながるという視点で協議および助言をいただいた。

③ 授業公開 Week

学期に1回「授業公開 Week」と銘打って、決められた週内に活動案（指導案のこと。本校では生徒の活動を中心に据えるため活動案と呼ぶ）を書き、授業を見て、気づいたことをざっくばらんに話す期間を設けた。

④ 全体会

非常勤講師を含む全職員が一堂に会し、授業について話す場を設けた。話すテーマは、教務主任と研究主任で相談し、学校の実情と合うものとした。また、現職教育のテーマである「自分メディア力の育成」について考える機会を全体会のなかに設け、自分自身の長所について見つめ直し、各自が実践できることを模索し、教科指導に活かしていくことを目指す取組を行った。

⑤ 自主勉強会（学び場）

公開研究授業の前に、授業者の模擬授業を行い、有志の教員が集まり、授業を参加して気づいたことをざっくばらんに話す機会を設け、授業力の向上を目指した。

⑥ 公開研究授業

平成25年度から、年1回、市内の教員対象に授業を公開し意見をもらっている。今年度は11月1日（金）に「技術科」と「特別の教科道徳」の2分科会を設け、「授業者の目指す生徒像に迫ることができたか」をテーマに、28名の参加者とともに公開授業および研究協議会を開いた。

(2) 実際の授業について

本校では、1授業時間内に他の生徒と関わりのある授業を「学び合い」と定義し実践を行ってきた。隊形はペア、男女市松模様の班、意見を共有するコの字、席を自由に離れる自由移動がある。これらの様々な授業形態を生徒の実態に合わせて選択し、教員の目指す生徒像に近づけるために創意工夫しながら授業を展開した。

① 課題設定の工夫

基本的には、授業開始後5分以内に課題に取り組むよう課題提示を行う。ただし、本時の中心課題に迫るために時間を要する際は、10分ほど時間を費やすこともあった。生徒に「なぜ?」「どうして?」という疑問を起こさせ、自分たちで「考えてみたい」「学んでみたい」「調べてみたい」という意欲が高まる課題設定を目指した。課題の内容は、教科書の問いを解けるようにすることを基本とするが、なぜそうなるのかを3人に説明し、納得してもらえたらサインをもらうことをよく取り入れた。また、先に解を示して、「そうなる理由を中1の生徒（内容によっては小6の児童）に分かるよう説明しなさい」という課題も与えた。これにより、生徒は説明の必要があるため、より広く、深く調べたり、訊き合ったり、考えようとした。した。

また、全員が課題を解決するための時間を30～40分になるように設定した。そのためには、学力上位の生徒が興味・関心を抱くような少々難しい課題（学力上位2割の生徒

が12分ほどで解ける目安)の準備が必要であった。逆に課題が簡単すぎれば、瞬く間に生徒たちの興味・関心は薄れ、授業から離れていく恐れがあった。この課題設定はどの教員も苦労を重ねている現状がある。

② 学習形態の工夫

課題を解決するために、友達や教員に聞きに行ったり、教卓に置かれている教員作成の解説を読んで理解したりするのもよいこととした。そのため、席を自由に移動してもよい。その際、問題が解けたという感覚も大切だが、自分で納得することを心がけるよう伝えた。また、クラスの全員が理解できることを目標とし、win-winの関係を築くよう指導した。授業の終わりには、復習や本時のまとめを行うのではなく、生徒の活動の様子を評価し、良かった点と改善点を伝えるようにした。



【授業の様子】

③ 学び合いにおける教員の支援

生徒を見る上で大切なことは、生徒が「自分・教材・仲間と向き合っている」かどうかである。この視点をもつことで、授業に参加していない生徒が見えてくる。そして、その生徒が学び合いに参加できるように支援していく。自分と向き合えていない生徒に対しては、教材や他の生徒の意見について、「どう思う？」と尋ね、考えることを促していく。次に、教材と向き合えていない生徒に対しては、視点を変えて見られるように他の生徒や班の活動や発言を紹介していく。このような支援により、生徒たちを自分および教材に向き合わせていった。

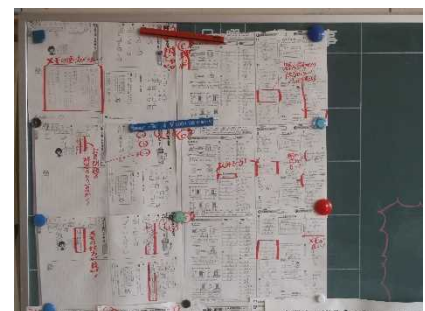
④ 活動案の工夫

一般的な指導案は、教員がどのように指導をしていくかが中心となりやすい。しかし、生徒の脳がどのように動くべきかを中心に授業を組み立てるべきと考え、生徒がどのような活動をしていくのかを明記することとし、活動案と名付けた。そして、授業を通し生徒の変容をビフォーアフターとして明記することで教員の願いをより明確にした。また、形式は、できるだけ簡略化し、活動案を書く抵抗感を薄めた。

(3) 家庭学習について

① 理想的な取組の見える化

家庭学習に対し、一生懸命取り組んだことの分かるものをコピーし、教員のコメントを書き込み掲示した。選んだ基準は、間違いに対し、気を付けるポイントを書いていた、教員に対する質問が書いていたりしたものである。また、暗記できていなかったため、繰り返し書き込んでいるものも掲示した。



【家庭学習の見える化】

② 内容の吟味

パズル的な要素を含んだプリントや、授業の進度に応じつつ、興味を持って取り組みそのようなプリントを家庭学習とした。また、基礎基本の定着を目的として、1、2年生におい

て学習コンクールを年2回実施した。その内容を家庭学習に取り入れ、日々の学習が成果として現れるように工夫し取り組んだ。

(4) 継続する取組について

① 今日の私

国語力の向上と一日の振り返りの場の設定を目的に、自分の気持ちを言葉で書き残していく取組を帰りの会に行っている。これは、映画『みんなの学校』で話題になる直前の大阪市立大空小学校を参観した際に、当時の木村泰子校長先生からご助言をいただいて本校に合うように作り直したものである。この取組により、その日に感じた新鮮な気持ちを言語化していくことで、国語力を構成している「考える力」「感じる力」の向上につながっていると考え継続して取り組んでいる。

② 15分のSST（スペシャルスマイルタイム）

毎週水曜日、朝8：15から15分間に名城大学教授の曾山和彦先生が提唱するソーシャルスキルトレーニングとエンカウターの要素を含んだ「アドジャン」を行っている。振り返る時間を大切にし、学級の間関係の構築に役立てるとともに、授業での話し合い活動に活かしている。

③ 本に触れる機会作り

全国学力・学習状況調査やNRTの結果から語彙（とくに熟語）に弱点が見られる。そこで、本に触れる機会を多くできるように生徒玄関前に図書コーナーを設置し、新刊など生徒が手に取ってみたいくなるような書籍を並べられるように、委員会活動と連携して取り組んでいる。

3. 取組の成果の把握・検証

(1) 現職教育の充実について

課題であった学習内容の定着について、令和元年度全国学力・学習状況調査「数学」において、本校数値が全国平均を上回る結果となった。なかでも、それぞれの要素を関連付けて解決する力は、自分の考えだけでなく、他の生徒の考え方に触れ、様々な角度で問題を考える授業実践の成果と言える。このことから、学習した内容の定着度において、効果があったと考えられる。しかし、「国語」において、話すこと・聞くことの数値が全国平均を大きく下回った結果は課題である。

【全国学力・学習状況調査結果 「国語」 全国平均との比較】

	1一	1二	1三	1四	2一	2二	2三	3一	3二	4
本校	59.8	59.8	92.7	56.1	85.4	62.2	56.1	85.4	80.5	80.5
全国	63.9	61.5	91.2	56.8	80.4	69.7	60.4	87.4	77.8	78.7
差	▲4.1	▲1.7	1.5	▲0.7	5.0	▲7.5	▲4.3	▲2.0	2.7	1.8

【全国学力・学習状況調査結果 「数学」 全国平均との比較】

	1	2	3	4	5	6(1)	6(2)		
本校	63.4	72.0	84.1	51.2	72.0	46.3	45.1		
全国	62.2	70.1	83.6	48.9	72.8	38.8	34.7		
差	1.2	1.9	0.5	2.3	▲0.8	7.5	10.4		
	7(1)	7(2)	7(3)	8(1)	8(2)	8(3)	9(1)	9(2)	9(3)
本校	80.5	86.6	61.0	67.1	47.6	61.0	67.1	67.1	74.4
全国	75.8	77.2	53.3	57.9	40.8	53.6	57.4	59.7	69.6
差	4.7	9.4	7.7	9.2	6.8	7.4	9.7	7.4	4.8

授業力の向上をねらいとした研究授業、全体会、自主勉強会などの取り組みによって、我々教員がどの生徒がどういう様子で学んでいるか見取ることができるようになってきた。それは、教員の生徒を見る目が養われたからである。これは、生徒の姿をもとにした授業研究に取り組み、良い姿があればその理由は何か、良くない姿があればその理由は何かを協議してきたことによるものである。それによって、生徒の取り組みに対して教員が、価値づけることができるようになった。そして、このことが授業改善につながる大きな要因と考える。

(2) 実際の授業について

授業中、学習に対して全く関心を示さない生徒から、「わからない」「教えてほしい」という声をよく耳にするようになった。このことから、授業への参加への意欲、分かってほしいという気持ちの高まりが、特に学力の低い生徒から感じられる。実際に、令和元年度の学校評価アンケートにおいて、「生徒が主体的に取り組む学習は役に立っていると思う」という数値が生徒、保護者ともに上昇した。

【学校評価アンケート結果】

質問：生徒が主体的に取り組む学習は役に立っていると思う								
点数	+2点	+1点	-1点	-2点	0点	-2<評価<2		
回答	そう思う	まあ思う	思わない あまり	思わない そう	わからない	R1	H30	増減
生徒	102	79	35	19	19	0.89	0.71	0.18
保護者	24	73	42	24	26	0.19	-0.20	0.39

他には、生徒同士が互いに自分の考えや感想などを、自分の言葉で語り合う姿が随所に見られるようになった。また、疑問を解決するために、班の中や全体で、あるいは自由に動いて質問する姿も見られるようになった。

(3) 家庭学習について

家庭学習の取り組み方の改善を図るため、上手に取り組んでいる生徒のノートや問題集を教室や廊下に見える化したことによって、ノートの使い方が改善され、間違えた問題の解答を何度もノートに書き込む生徒が現れた。他の生徒から学ぶ観点は、学び合いと同様であり、掲示されると参考にしようと掲示板に群がる生徒たちの姿があった。以上のことから家庭学習の見える化は効果があった。

(4) 継続する取組について

「今日の私」に継続して取り組むことで、自分の考えを簡潔に意見文として表現することができるようになった。このことは、令和元年度全国学力・学習状況調査の記述問題の記入率が上がったことからわかる。また、定期テストなどの記述問題の記入率が上がったことから、自分の考えや意見を書く力が身につけていることが推測される。また、週1回、15分のSSTに取り組んできたことにより、授業での市松模様の班での話し合い活動が活発となり、多面的な意見が出るようになった。このことから、学級の人間関係は構築され、安心して意見が言える雰囲気となったと言える。

4. 今後の課題

単元を通した課題の設定に甘さがあり、形だけの対話的活動になっていることもある。また、1授業時間においても、その教科の本質に迫る課題設定になっていないことがある。その点が全国学力・学習状況調査の結果にも現れている。具体的には、数学の確率の文章題の正答率が低かったことが挙げられる。ここから数学の図や表を介して文章にある情景や場面を想起する力の必要性を感じた。そのため、生徒がより広く、深く探求し、授業のねらいに迫ることのできる課題をさらに工夫し、教材研究はもちろんのこと授業研究において、教科を越えて生徒を見る目を養い、適切な課題設定ができる力を高めていきたい。また、授業で教員が話す時間がどうしても多くなってしまいう傾向がある。活動時間の確保のために、教員の説明などで話す時間を減らさなければならない。

教員の力量向上の手立てとして、職員室内での会話、コミュニケーションの必要性も強く感じている。授業改善において、授業が上手な教員から授業展開のポイントを共有することは、生きた教材であり、活用しなければ損である。目標は、互いの授業を見合い、職員室で授業について褒め合い、修正し合う内容の会話が気軽にできることである。その会話がしやすい雰囲気作りも必要と考える。

生徒は、教員が意図をもって活動させたことによって学力を高めていく。反対に、教員が意図なく活動させても、学力を高めることは望めない。「活動あって学びなし」ということにならないよう、どうやって学び合いをさせるかではなく、学力を高めるためにどのような学び合いを手段として用いるかを今後も工夫していきたい。また、主体的・対話的で深い学びにつなげるための授業スキルを明確にし、非常勤講師も含めた職員全体のスキルアップが必要と考え、現職教育を計画する。また、職員に校外で開催される自主研修会の案内を情宣し、指導力および授業力の向上を働きかけたい。

(様式3)

「主体的・対話的で深い学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の
重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）」

令和元年度委託事業完了報告書【協力校】

都道府県名	愛知県	番号	23
-------	-----	----	----

協力校名	愛知県安城市立桜井小学校
------	--------------

1. 当初の課題

(1) 全国学力・学習状況調査等から分析した本校の現状

本校の調査結果は、国語は全国平均を下回り、算数はほぼ全国平均となった。国語では、特に「話す・聞く能力」と「言語についての知識・理解・技能」の設問の正答率が低かった。算数では多くの項目で全国平均とほぼ同等であり、「量と測定」の項目でやや全国平均を上回った。

質問紙調査の結果からは、全国と比べて国語の関心が低い傾向が見られた。また、「自分にはよいところがある」「家庭で計画的に学習をしている」「コンピュータなどのICTを授業で使用した頻度」に関する質問について全国平均と比べて低い傾向があり、自己有用感や家庭での学習習慣、ICTの活用に課題が見られた。

(2) 現状の課題から取り組むべき内容

現状をもとに、解決が必要である課題を以下の3つにまとめた。

- ①友達や教師に認められる活動を通して、学級での所属感、自己有用感、自己肯定感を高め、互いに認め合いながら、何事にも粘り強く諦めずに取り組む児童や学級集団を育てること。
- ②児童の実態を把握し、温かくかかわり合いのある授業構想のもと、明確な目標を設定する。仲間と考えを深め、深まった学びの足跡を文章や図表で表したくなる授業を行い、学びが他の教科や生活に生きる感覚を味わわせること。
- ③学校と家庭をつなぐ媒体としてICTを有効活用し、家庭学習支援ソフト（eライブラリ）の普及を図り、家庭での学習習慣の確立を目指すこと。

2. 本年度の取組内容のまとめ

課題をもとに本年度取り組んだ内容を以下の3つにまとめた。

- ①自己肯定感や所属感、自己有用感を高める学級経営について、授業の進め方、環境の作り方など、学級経営に生かせる具体的な研修を進めた。
- ②児童の実態を把握し、実態に合わせた目標を設定し学び合う授業づくりについて講師を招き、授業研究会を行い研修を進めた。
- ③ICTを活用する取り組みについて、宿題や予習などで家庭学習支援ソフトを有効活用し、授業の中でも取り入れる機会をもち、自主的に家庭学習に取り組む習慣を身に付けさせた。

3. 取組の成果の把握・取組状況からの検証

(1) 成果①：子ども一人一人の成長を見取り、じっくりと子どもを理解することができ、学級経営に対する職員の意識の向上を図ることができた

本校では3回にわたり講師を招き、YPやQ-Uのアンケートデータをもとに、個の成長を願いながら授業を実践した。5年3組の体育の授業におけるボールゲームの対戦前の作戦会議では、教師はアンケートによる児童理解のもとに、仲間と関係をもたせるワークシートを作成した。教師はグループワークを授業の中で設け、ワークシートをもとに効果的な言葉かけをした。普段話し合いに積極的に参加できない児童は、自己肯定感や自己有用感をもちながら話し合いに参加し、ボールゲームに積極的に参加できた。右の写真は、「ここが弱いからぼくがここを守るね」と作戦会議で自分の役割を考えて話している様子である。また、その後試合の中でも、右の写真のように自分の役割を話し合い、積極的に授業に参加する姿が見られた。教師が児童の状態を把握し、児童にとって最適な教材を用意し、的確な言葉かけをしたことで、児童がクラスの中で居場所をもちながら、仲間との学び合いに参加できていた。この例のように、全ての教師がQ-UやYPのアンケートをもとに児童生徒の実態を分析し、一人一人の児童理解を進め、実践を進めることができた。



写真1 「グループの作戦会議」



写真2 「試合中の言葉かけ」

また、実践後講師からは、子ども理解を進め、一人一人の変容を追うことのよさを価値付ける講話をいただき、教師の実践のよさを具体的に指摘していただいた。

講師の講話から

- ・子どもを大切にする教師の姿があった。学級に子どもの居場所があった。
- ・支え合っている関係性がみられ、それをもとに頑張る子どもの姿が見られた。
- ・一人を仲間の子が支える場面がみられ、グループの中でそれぞれが主人公でいられた。

このように講師の先生から、一人一人の子どもの自己肯定感や所属感、自己有用感を高めることへの手立てや、教師の日々の学級づくりについて評価をしていただくことで、「自分の意見を心置きなく言える学級をつくっていきたい」「たくさん子どもの声を聴いて学級経営を見直したい」など、教師からも意欲的な感想がみられた。

(2) 成果②：学び合う授業づくりについて、児童や教師の学び合うことのよさへの意識の向上を図ることができた

本校では学び合う授業についての授業公開をし、大学教授等からの指導を繰り返していただいた。研修を進めていくなかで、学び合いの授業の形が学校全体に浸透してきた。また、授業後に協議会をもったうえで、指導をいただく機会を繰り返し設けたことで、学び合う授業のよさについて実感をもって学び、自信をもって次の授業に向かうことができた。以下は公開された学び合いの授業実践の单元名である。

- ・小2生活「ペアで考えよう ～何番目にいるかな～」
- ・小3音楽「よりよいリズムを相談して手拍子リズムをつなげよう」
- ・小4体育「タグラグビーでパスが通るような作戦を考えよう」
- ・小6社会「国民の権利と義務について意見交換しよう」

それぞれの授業では、講師に教師の授業について評価をしていただいた。以下は、各教師が授業について価値付けていただいた言葉の一例である。

講師の講話から

- ・夢中で学び、グループの中で支えながら参加している子がいた。
- ・子どもの学びに添った声、トーンで教師が学びを進めていてよい。
- ・教師が全体とグループをうまくつないでいた。子どもが安心して学んでいた。
- ・教室全体とグループがつながる授業がたくさん見られるようになってきた。
- ・古典をもとに場面の読み取りで学び合うという視点がとてもよかった。
- ・子ども同士のアドバイスについて、よさを教師が価値付ける場面がよかった。

このように学び合うことのよさを実感した子どもの姿をもとに、講師により繰り返し授業を価値付けてもらうことで、今後の授業に前向きに取り組もうとする姿や、学び合う授業の価値を感じる姿がみられた。

(3) 成果③：ICTを活用し、自宅で学習する機会を増やすことができた

本校では、パソコンやスマートフォンから家庭学習をする方法を学び、学校ホームページのバナーから学習支援ソフトを活用して学習する機会を設けている。同時期に保護者懇談会を開き家庭学習を促したところ、各家庭においてパソコンやスマートフォンからホームページにアクセスして家庭学習をする児童が多数見られた。

3年生では、学習支援ソフトを利用した授業が公開された。授業では、まず旗の間の長さを考えクラスで話し合いながら1問解いた。その後、eライブラリを使って応用的な問題を解いていった。応用的な問題では、子どもたちは集中して5分程度eライブラリに取り組んだ。約5分間で、クラス35名の内、6名が全15問を回答し、クラスの半数以上は10問以上回答した。全問回答しても、何度も繰り返し解くこと



写真3「タブレットで問題を解く」

ができるため、黙々と問題に取り組む姿がみられた。全問解けていない児童には残りを宿題にすることもでき、自宅においてもeライブラリが有効活用できるようにした。

授業以外では、勉強が苦手な2年児童Aが、1年生の問題を保護者と一緒に学習し、保護者とともに学習に取り組むきっかけづくりとなった。また、授業ではあまり積極的に発言することのない6年児童Bが、ほぼ毎日ICTによる家庭学習に取り組んでいることを学習履歴から知り、担任が本人の努力を認めることができた。

このように、ICTを活用した家庭学習が、数多く見られるようになってきた。

4. 今後の課題

成果をもとに以下のことを課題とし、次年度の事業を進めていきたい。

- ①データをもとにより細やかに一人一人の自己有用感、自己肯定感を育むこと
- ②学び合いの授業実践を校内で共有し、参考にできる事例を増やしていくこと
- ③家庭学習が教室で生かされるICT活用授業モデルを更に構築していくこと

(様式3)

「主体的・対話的で深い学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の
重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）」

令和元年度委託事業完了報告書【協力校】

都道府県名	愛知県	番号	23
-------	-----	----	----

協力校名	愛知県安城市立安城北中学校
------	---------------

1. 当初の課題

(1) 全国学力・学習状況調査等から分析した本校の現状

本校における調査結果は、国語、数学、英語のいずれにおいても全国平均を上回っていた。一部、数学において「数学的な表現を用いて説明すること」、英語において「情報を正確に聞き取ること」に関する設問の正答率が全国平均を下回った。

質問紙調査の結果からは、全国と比べて国語の関心が低い傾向が見られた。また、「自分にはよいところがある」「家庭で計画的な学習をしている」「コンピュータなどのICTを授業で使用した頻度」に関する質問について全国平均と比べて低い傾向があり、自己有用感や家庭での学習習慣、ICTの活用に課題が見られた。さらに、不登校生徒の割合は年々増加しており、学習形態の工夫をする必要があると考えた。

(2) 現状の課題から取り組むべき内容

現状をもとに、解決が必要である課題を、以下の3つにまとめた。

- ①学級づくりの場において自己有用感を味わわせるとともに自分が必要とする力に気付かせ、学びの意欲化を図ること。
- ②生徒の思考を軸にした単元構想のもと、生徒の主体性を重視し、対話活動を通して深い学びに至る各教科の授業づくりを中心に研究を展開していくこと。
- ③授業だけでなく、学校・家庭全ての生活における、生徒の主体性や学ぶ意欲の向上の基盤となる家庭学習力を高めるため、ICTを利用した研究を展開すること。

2. 本年度の取組内容のまとめ

課題をもとに本年度取り組んだ内容を以下の3つにまとめた。

- ①自己肯定感や自己有用感を柱に教師が互いに授業や学級経営について話し合い、生徒のよさを認める具体的方法について研修を進めた。
- ②授業検討会を行い研修をすすめ、講師を招いて生徒の主体性を重視し、対話活動を通して深い学びに至る授業づくりの研究を展開した。
- ③家庭学習力を高めるため、家庭学習支援ソフト（eライブラリ）の普及に努め、家庭学習の充実を図った。

3. 取組の成果の把握・取組状況からの検証

(1) **成果①：学級経営・支え合う環境づくりについて、生徒の自己肯定感や所属感、自己有用感が高める研修を進め、職員の意識を高めた**

本校では、Y PやQ-Uをもとに学級について分析した上で授業を行い、講師を招き、学級経営・支え合う環境づくりについて講義をしていただいたり、学び合いの土台としての学級経営に視点を当てて実践をもとに指導をいただいたりした。支え合う温かな集団づくりに対する職員の意識を向上することができた。計3回にわたって講師を招き授業分析も含めて学級経営についても評価をしていただき、講師からは、「教師の肯定的な子供観こそ最も大切な教師の資質・能力である」等と指導を受けた。教師からは「たくさん子供の声を聴きたい、学級経営を見直したい」などと意識の向上がうかがわれ、高い意識のもとで生徒の自己肯定感や所属感、自己有用感が高めるクラスづくりをすることができた。

(2) **成果②：学び合う授業づくりについて、子供や教師の学び合うことの意識の向上を図ることができた**

本校では、学び合う授業についての授業公開をし、講師から指導をいただいた。

中1国語では「古典の世界に親しみ、楽しく学び合う授業」を公開し、竹取物語を題材にそのおもしろさについて話し合い、物語の描かれた時代や作者の考え方に目を向けながら作品の魅力を考えた。この授業も含め、講師の先生にはそれぞれの授業の学び合いについて価値付けていただく指導を受けた。以下はその指導でいただいた言葉の一例である。



写真1 「グループでの話し合い」

- ・古典をもとに場面の読み取りで学び合うという視点がとてもよかった。
- ・子供の集中が見られた、こんな授業がたくさんあることが大切。
- ・学び合いに全員が参加している。今後が期待できる。
- ・一斉授業ではここまで書くことはできない。子供たち同士で刺激をし合うからこそ、これだけの振り返りができた。

研修を進め、繰り返し講師に実践の価値付けをしていただく中で、対話型の授業が学校全体に浸透していった。学び合う授業のよさを実感できた教師が、自信をもって次の授業に向かうことができるようになってきた。

(3) **成果③：ICTを生かした家庭学習の充実を図ることができた**

本校では、パソコンやスマートフォンから家庭学習をする方法を学び、学校ホームページのバナーから学習支援ソフトを活用して学習する機会を設けた。この家庭学習支援ソフトの活用によって、教師は学習プリントの作成が容易となり、宿題として利用する教師が増えてきた。また、ホームページから学ぶ機会を授業の中で取り込み、それを家庭でのICT学習に生かす機会もたくさんもてるようになった。以下は3年生のeライブラリを用いた授業の様子である。

数学の「図形と相似」において、基本コース、標準コース、挑戦コースの3コースに分けて、自分に合った問題を選択してeライブラリの問題演習に取り組むようにした。生徒たちは、操作方法を聞くと、図形の文章問題に次々と取り組んでいった。数学を苦手としている生徒は、基本コ

ースの比較的簡単な問題に対して、質問をしながら最後まで粘り強く問題を解くことができた。また、数学が得意で、普段の授業では時間をもてあましてしまう生徒たちも、難しい問題に次々と挑戦できることで意欲を持続させることができた。

授業の最後には、「続きは家でもやってみましょう」と声掛けをして、更なる反復練習を行う姿を期待した。その後、家庭での学習履歴を確認すると、家庭でも積極的に練習問題に取り組む生徒が多数見られた。

この協力校の中学校では、eライブラリによる家庭学習の利用数が、昨年度については2,186回の利用であったが、本年度、2月中旬までに4,773回となり、約2.2倍に増えた。また、特に定期テスト前に復習として利用する生徒が多く、日常的に利用する生徒は全校生徒の約3割に上ることがわかった。他にも、高校の入試問題が充実しているため、受験を意識した生徒が繰り返し利用する事例の報告も多く見られた。学習状況調査の質問紙における「家で、計画を立てて勉強している」という項目について肯定的な回答をした生徒が、4月当初は約5割であったが、翌年の1月には7割を越える結果となった。

以下は、協力校の中学校から報告された声である。

「特にテスト前に学習履歴が多く残っており、積極的に取り組んでいる。」
「保護者会で周知したところ、多くの学習履歴が残るようになってきた。」
「不登校児童生徒にとって、1つ学習の機会が増えたため、教師の子供へのアプローチの機会が1つ増えた。」
「テスト期間中の放課後にコンピュータ室を開放し学習できるようにしたところ、たくさんの学習履歴が見られた。」
「高校入試問題が手軽に手に入るので利用しやすい。全国の問題、過去の問題などいろいろと活用できる。」
「特別支援学級の生徒が学年を変えて学ぶ機会ができた。」

以上のように、ICTを生かした家庭学習が、学校生活にも反映し、効果的にはたらいっている事例がたくさん見られるようになってきている。

4. 今後の課題

成果をもとに以下のことを課題とし、次年度の事業を進めていきたい。

- ①生徒のデータをもとに、自己有用感、自己肯定感を高める実践を増やしていくこと
- ②学び合いの授業事例を校内で共有し、参考にできる事例を発信していくこと
- ③家庭学習が教室で生かされるICT活用授業モデルを更に増やしていくこと



写真2 「自分で問題を選択する」



写真3 「難しい問題に挑戦する」